青の祓魔師～紫眼が見つめるモノ～

邪餽 珀磨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青の祓魔師～紫眼が見つめるモノ～

【Ｎコード】

Ｎ１１３８Ｘ

【作者名】

邪餽　珀磨

【あらすじ】

祓魔師（エクソシスト）になると決めて早１０年。五十嵐　要はメフィスト＝フェレス卿に頼み、祓魔塾に入れてもらう事になった。彼女は、自分の野望のために突き進む。

五十嵐　要

「お久しぶりですね、五十嵐（いがらし）　要君（かなめ）。１０年ほどでしょうか？」

「お久しぶりです。相変わらずお元気そうですね。……オタク度も上がったみたいですし」

「はぁい、お蔭様で☆」

東京にある『正十字学園』。
その理事長室に、ピエロを想わせる紳士（自称）と白髪で毛先を紫色に染めた子供の姿があった。

「どうしても駄目でしたか？“アレ”では、祓魔師（エクソシスト）の資格はもらえませんでしたか…」

「はい。“アレ”ができるのは、今のところ要くんだけです。ヴァチカン本部は“アレ”だけで認める訳にはいかない、と言っていました」

紳士（自称）の方は、飴と紅茶を楽しみながら話している。

子供の方は、立ったまま溜息をついた。

実は、この子供・五十嵐　要は祓魔師になりたくて、ある事を申請していたのだ。
それを日本支部『正十字騎士團』は許可したのだが、本部は許否したのである。

要には、野望があった。
その為には祓魔師としての資格を得る事が一番の近道だと思っていたのだ。

だが、それは許否されてしまった。
という事は、要は“アレ”以外を身につけなければならない。

「ボク…“アレ”以外の知識がないんですよね…。あまり気が進まないんですけど、祓魔塾に入塾させてもらってもいいですか？」

さらっと言う。

「気が進まない、とか…そこの最高責任者を目の前にして言う事ではありませんよ。そんなトコロは父親にそっくりですね……」

「うわー。それは最大の脅威ですね、治す努力をします」

今度は紳士（自称）が溜息をつく。
大袈裟に、ヤレヤレ…といった様子で。

紳士（自称）は、口に含んだ飴を噛み砕き、手元の紅茶で流し込んだ。
そして、一息入れると要を真っ直ぐに見つめて、ゆっくりと口を開いた。

「いいでしょう。入塾を認めます。この鍵を持っていなさい」

「ありがとうございます。では、ボクの荷物は旧学生寮に運んでおきます。そこから通うので、ヨロシクお願いしますね」

「あそこは今、男子生徒が2名宿泊していますが…？」

「構いませんよ」

「……」

「……？」

無言で要を見つめるが、当の本人はキョトンとして首を傾げる。
紳士（自称）は、先程よりも深く深く溜息をついた。

「君は…自分が何者か分かっていますか？」

「分かってますよ。大丈夫ですって、バレないようにしますから」

「君、女の子でしょう？」

「そう…ですけど？」

要には何故、紳士（自称）がそう聞いてくるのかが理解できないでいた。
あちらが、深い溜息をつく度に首を傾げた。

「そんなトコロも父親に似ていますね……」

「うわー…。それは洒落にならないですね。治すように全力を尽くします」

「そうしてください。では、もう行っていいですよ。明日から塾に参加してもらいますので、見学でもしておいてください」

「では、失礼します」

丁寧に頭を下げ、理事長室から出る。
先程もらった鍵を使ったからか、来た時には一度も通らなかった道が目の前に広がっていた。

しばらく歩いていると、気が付けば古い建物の中に入っていた。
ひたすら長い廊下に、塾生と想像できる騒ぎ声。

チャイムが鳴ると、講師である祓魔師が出て来た。
要の白髪は、薄暗い廊下では目立つらしくすぐに気付かれた。

「どちら様ですか？」

「初めまして。明日から入塾する五十嵐　要です」

「君が…？そうですか、申し遅れました。僕は奥村　雪男、この塾で医療・薬学の講師をしています」

お互いに頭を下げて挨拶を交わす。

「では、今の内に挨拶を済ませてしまいましょうか」

奥村がそう言うと、調度いい具合に塾生達が教室から出て来た。

「お？誰やアレ」

「うわぁ…子猫さんより小さい子、久々に見たわ～」

「おーい、雪男ー。そいつ誰だー？」

出て来た塾生達は、警戒する訳でもなくすんなり近付いてくる。
中にはヤンキーみたいな少年もいた。

「初めまして。五十嵐　要です。明日から、皆さんと一緒に塾で学ばせていただきます。ヨロシク」

その後、一人一人の自己紹介が終わり、明日からヨロシク、と皆が帰路についた。

理事長室のドアをノックする音。
理事長・メフィスト＝フェレスは、ドアの外にいる者を招き入れた。

「失礼します」

「ようこそ、奥村先生」

奥村　雪男は、睨み付けるようにメフィストを見た。

「こんな時期に入塾させるなんて…何を考えているんですか！」

「こんな時期…だからですよ。あの子も承知の上です」

あと一ヶ月もすると、候補生（エクスワイア）の認定試験が行われる。
もちろん、要も参加する予定だ。

雪男が心配しているのはそんな事じゃない。
要と同じく塾生の、兄・燐の事だ。

「あの子なら大丈夫です。間違っても、殺される事はきわめて低い」

そう説明しても、雪男は納得していない様子だった。

「では、奥村先生にはあの子の監視もお願いします。これは上司命令ですよ☆」

「く…っ。わか…り…ました……。失礼しました」

「次回からは電話でお願いしますね」

「……はい」

雪男は、悔しそうに理事長室を去った。

夜も遅く、寮の屋根に登り月を眺める少女が一人。
その体には紫色の炎が燈されている。

「遠いなぁ…」

少女の呟きは、暗闇の中に溶けて消えるようだった。

.

注意書き＋α

どもども☆邪餽です。

この度は『青の祓魔師～紫眼が見つめるモノ～』を拝読していただき、真にありがとうございます。

この小説では、度々このような休憩を挟みたいと思っています。

と言うのも、終わっていない作品をファンフィクションで書かせてもらうのが初めてでございます。

ですので、原作と違う方向に向かうかもしれません…。

それでもお付き合いしてくれる方…感謝感激雨霰！！

てな具合で物語を進めて行きたいと思います。

感想や評価、アイデア等ありましたら遠慮なく…あ、もちろん、誤字脱字の注意でも構いません。

オリジナルの悪魔も出る予定ですが、もしかしたら原作とはかけ離れたものになるかもしれません。

では、次の回でお会いしましょー☆

奥村　燐
「ちょぉぉっと、待てぇぇ！！」

あれ？どうしたの？

奥村　燐
「『どうしたの？』じゃねぇ！なんだよ1話の、俺の台詞！あれだけか！？」

なんだ…文句かよ。
お前、主人公じゃないんだからしょうがないだろ。

奥村　燐
「は？俺、主人公じゃねえの！？」

主人公は要だ。
お前を主人公のまま出したら、原作まる写しになるだろうが。

奥村　燐
「でも、少な過ぎんだろ！てか、あれの前に書いてたのあっただろ！」

あー…あれか……。
あれは、闇に葬った…。

奥村　燐
「うおぉぉ…！あれの時なら沢山台詞あったのに…っ」

メフィスト
「いえ、あれはいけません。私の出番が少な過ぎますからね！」

奥村　燐
「メ、メフィスト！？どっから現れやがった！？」

メフィスト
「ちゃんと玄関から上がって来ましたよ。というか…貴方、また私を呼び捨てにしましたね？私は貴方の上司だと言ったでしょう」

いーな…。
子供は注意だけで済んで…。俺なんか、解雇の危機に立たされてるもんな…。

てか、前のやつだとメフィストの扱い名前だけ表記しただけだったもんね…。

メフィスト
「その通り！……ですが、今回のにも不満があります…」

不満…？
はて？不満になるような事、書いたかな…？

メフィスト
「1話の最初の辺り、私の名前を明かさずに表記したアレですよ！」

ちゃんと『紳士』って表記したじゃん。

メフィスト
「そのあとです！（）の中に『自称』と入れたでしょう！何度も何

度も…！！」

だって、本当の事だもん。
俺らからしてみれば、メフィストの格好を見て『紳士』と思う奴はいないと確信してるぞ？

ピエロみたいだし、オタクだし…。
それが嫌だ、って言うから『紳士（自称）』にしたんじゃんか。

メフィスト
「納得できませんね」

そうか…。
じゃあ、メフィストの出番は今回限りだな。

メフィスト
「んな！？」

俺が作者なのを忘れんなよ？
この『青エク～紫眼～』では、原作通りになると考えない方が身のためだぞ。

では、メフィストも黙ったところで

奥村　燐
「俺の話は終ってねー！」

…はいはい。
じゃあ、次の話では出番多くしてやるよ…。

要の次にな。

奥村　燐
「え？マジ？やったー！」

さて、燐も落ち着いたところで…これで、お開きにしたいと思います。

では、またお会いしましょー☆

祓魔訓練生（前書き）

要くんは“カナメ”と変換しております。
……だって、文章にするとややこしいんだもん…。

祓魔訓練生

現在時刻、５：００。
いつもと同じ時刻に目が覚める。
太陽はまだ昇りきっておらず、外は薄暗い…うえに肌寒い。
カナメは学園の生徒ではない。
だが、正十字学園町から出る事は許されていないため、塾に行くまでが暇なのだ。
とりあえず、日課の散歩を始めることにした。

「いい風が吹いてる」

改めて、そう思う。
あと一ヶ月半で夏休み…本格的な夏がやってくる。
春の終わり、夏の始めの風の僅かな違いが分かるくらい、ここの風は『いい風』だった。

「五十嵐さんか？」

東京とは違うイントネーションに振り返る。
そこには、ソフトモヒカンに、真ん中だけ金髪に染めた少年がいた。

「勝呂くん…？どうしたの、こんな朝早く」

「五十嵐さんこそ…」

「ボクは散歩。勝呂くんはジョギング？」

「まぁな…」

カナメは『行ってきなよ』と促す。

「ボクは適当に散歩しとくから」

「じゃあ、軽く走って来るわ」

互いに手を振って見送り、別々の方向へ歩き出した。
しばらく歩いて、折り返して戻ってきた勝呂と途中まで一緒に帰った。

教室には、カナメを含めて９人と講師である雪男の１０人が揃っていた。
それぞれが、好きな場所に座り雪男が話す内容を静かに聞いている。
夏休み前に候補生(エクスワイア)認定試験があるらしい。

「…そこで来週から一週間、試験のための“強化合宿”を行います」

そう言って、皆にプリントを配布する。
プリントには強化合宿の参加と、取得希望“称号(マイスター)”の記入欄があった。

「全てに記入をして、月曜日までに提出してください…」

カナメは手騎士(テイマー)と騎士(ナイト)に印をつける。
もちろん、強化合宿にも参加する。

明日にでも出そうと思い、ファイルに閉じて次の授業に備えた。

「なぁ、五十嵐…」

「ん？」

「『称号』って何？」

「……ん？」

何を聞かれるのか、と身構えていたのだが…予想外の質問に返答が遅れてしまった。

目の前の少年は何を言っているのだろうか？
まさか称号を知らない？
そんな人間もいるのか、と首を傾げる。

「んー…と、『称号』は…祓魔師に必要な技術の資格の事だよ」

「うん、うん」

「じゃあ、一般的な種類について説明するね」

「えぇっ！？祓魔師って種類があるのか！？」

大袈裟に驚いた燐との騒ぎに気付いたらしく、数人の少年達が近付いて来た。

真ん中に勝呂、サイドにピンク頭の志摩と坊主頭の三輪の三人だった。

「五十嵐さん、どないしはったん～？」

志摩はひらひらと手を振って尋ねる。

「奥村くん『称号』が分からないんだって」

「はあ　ぇ！？」

「ボクも無知な方だけど、さすがに『称号』は知ってるから、今教

えてたところなんだ」

カナメは、明らかに苛々している勝呂をなだめるように言った。

「そんなんも知らんで祓魔師なるいうてんのか！たいがいにしいや！」

「まぁまぁ…。今、５つの『称号』について説明するところだったし、三輪くんは何にするの？」

どうも燐と勝呂は反発し合うものがあるらしく、いつも喧嘩してるらしかった。

それを、なんとなく感じていたカナメは、２人が衝突しないように話を振る。

振られた三輪は、やんわりした口調で言葉を発する。

「僕と志摩さんは『詠唱騎士（アリア）』目指すんやよ。詠唱騎士いうのは、聖書や経典やらを唱えて戦う称号」

「因みにボクは『手騎士（テイマー）』と『騎士（ナイト）』を希望中。手騎士は悪魔を召喚して、使い魔として戦う称号ね」

「へー…」

分かっているのか、少し不安になるが説明は続けられる。
というより、志摩が勝呂の希望する『称号』をつい言ってしまったのだ。

勝呂も2つの取得を希望しているらしい。
三輪や志摩と同じく『詠唱騎士』…そして『竜騎士(ドラグーン)』の2つだ。

それを聞いたからか、燐の瞳が輝きだした。
自分は何にするか…という好奇の現れのようにも思える。

「何にしよーかな…。
ドラグーンてなんだ?」

ドンッ!

と、痺れを切らした勝呂が机を叩いた。
すごく真面目な彼には、構わずにはいられなかったらしかった。

「あ゛ーーーもう!
難儀な奴やなぁ!! 竜騎士は銃火器で戦う称号!
騎士は刀剣で戦う称号…」

「じゃあ俺は騎士だな！」

「刀剣だけじゃなくて、槍とか斧とか…お坊さんならキリクとか使うみたい」

「へー…」

本当に伝わったのだろうか……？
カナメは、まだ心配だった。

「そーいやさ、雪男から聞いたけど…五十嵐って実戦経験あるんだろ？なんで、すぐに祓魔師にならなかったんだ？」

「そうなんか！？」

「…う、うん。申請はしてみたけど、本部がダメって…。それで祓魔塾に入ったんだ」

「ははっ。坊みたいに気合い入ってるもんな～。その髪、似合ってはるよ」

「あ、コレ？染めてるのは毛先だけだよ」

皆が他愛ない話をしている間、それをじっと眺める少女がいた。
少女の名前は杜山　しえみ。彼女は今日こそ『友達』を作ろうとしていた。

「これから悪魔を召喚する。図を踏むな……魔法円が破綻すると効果は無効になる」

現在、魔法円・印章術の授業中…。

講師のイゴール＝ネイガウスは教室の床に大きく魔法円を描き、そう言って早速悪魔を呼び出す。

呼び出された悪魔が現れた瞬間、教室中に硫黄臭が漂った。

慣れない臭いに、皆の顔が引きつる。

「屍番犬(ナベリウス)…。相変わらず醜い顔してますね。臭いもキツイ」

「あれが屍番犬か…。…は…初めて見たわ…」

呼び出された悪魔が襲いかかることはなかったが、その異形な姿に警戒しているようだった。

「悪魔を召喚し、使い魔にする事ができる人間は非常に少ない。悪魔を飼い慣らす強靭な精神力もそうだが――“天性の才能”が不可欠だからだ」

ネイガウスは、床に描いた魔法円の略図の紙を塾生達に渡す。そして、こう続けた。

「今から、お前達にその“才能”があるかテストする。先程配った紙に、自分の血を垂らして“思いつく言葉”を唱えてみろ」

ネイガウスに促され先陣を切ったのは、長い髪を2つに結った神木という少女だった。

「“稲荷神に恐み（かしこみ）恐み白す―”」

小さくて白い手には、2枚の略図の紙。
慣れた様子で、2体の白孤を呼び出した。

本人も得意げな様子で、召喚できない生徒達を見ていた。
だが、召喚ができるのが自分だけではないと、思い知らされる。
神木の召喚を目の当たりにした杜山は、召喚の言葉に相応しいか疑問になる程度の呼び出しをする。

「おいで、おいで～……なんちゃって…」

そうして現れたのは、緑色の小さな悪魔だった。
すぐに、ネイガウスが緑男（グリーンマン）の幼生だと告げる。
杜山は、嬉しそうに呼び出した悪魔に『ニーちゃん』と名付けた。

「“我が名に応じ、姿を現せ。我、汝と共に戦う風の者なり”」

ボソリ…と呟くように、悪魔を呼び出す。
カナメが持っていた略図の紙から、小さなつむじ風が現れ、次第に大きくなっていった。
大きくなった風は、速度を落としやがて1体の悪魔が姿を現した。

「うおぉぉ！なんだそれ、でっけぇネズミ！！」

「鎌鼬（かまいたち）だよ…。悪魔…というより、妖怪だね」

「流石だ、五十嵐　要…。うむ…今年は手騎士候補が豊作なようだ」

嬉しそうな声で、そう言った。

ネイガウスがそう言ったのも無理はない。
悪魔を操って戦う手騎士は、祓魔師の中でも数が少なく貴重な存在だからだ。

天性の才能――つまり、生まれ持った能力、そして強靭な精神力…。
手騎士は、その精神力が要だ。

まず、悪魔は自分より弱い者には決して従わない。
いくら召喚者とはいえ、自信を失くした者には逆に襲いかかるのだ。

「さっきも言ったが、使い魔は魔法円が破綻すれば任を解かれ消えるので…もし、危険を感じたら“紙”で呼んだ場合、紙を破くといいだろう」

ネイガウスは自分の魔法円を踏みにじり、屍番犬は消え去った。

それと同時にチャイムが鳴る。

「本日はこれまで」

略図の紙を引き裂くと、神木の白孤、カナメの鎌鼬は姿を消した。

「お前、すっげえな！俺、ぜんっぜん駄目だったぜ」

「んー…召喚は血筋も関係するからね。ボクのは…家系…かな……」

「おおと、お友達になってください！！」

「ん？」

大きな声が聞こえて、そちらに目をやると杜山と神木と朴がいた。
端から聞いていると、どうやら杜山が神木に友達になってほしいと頼み込んだらしい…。

だが、何やら様子がおかしい。神木の杜山への扱いが、友達のような平行関係ではない気がした。

それから数日、神木と杜山の“友達ごっこ”は続いていた。
そして、ついに強化合宿の日が訪れた。

強化合宿

「なぁ…」

「んー？なぁに？」

「アレ、完全にパシられてるよな……」

旧正十字学園男子寮。
その玄関先で、他の塾生の到着を待つ奥村兄弟とカナメがいた。
燐がカナメに、ここ数日の杜山の様子の感想を告げる。
雪男は気付いていない様子だったが、カナメは苦笑して頷いていた。

「つーか、寮で合宿って意味あんの？」

「この寮、人がいないから都合がいいんだよ」

「いない！？」

驚愕する燐に、雪男とカナメが『気付いてなかったの！？』と驚愕する。

「ここボクらしか住んでないよ？ほぼ貸し切りだね」

「一般生徒はもっと綺麗な新館の方で生活してるよ。……あ、来たね」

向こうから塾生が現れる。
それぞれに旧男子寮の感想を口にしながら…。
神木と杜山の“友達ごっこ”は今日も続いていた。

塾生達に部屋割をし、荷物を置いて広間に集合する。
初日とはいえ、これは“強化合宿”なのだ。その監督を仕切る雪男はやる気満々だった。
むろん、やることは“勉強”である。

「…はい、終了」

夜も更けてきた頃、ようやく雪男から終了の合図が入る。

「明日は6時起床。登校するまでの1時間、答案の質疑応答やります」

「はーい」

燐にはオーバーワークだったらしく、頭から湯気を出して外へ歩いて行った。
ケロッとしているのは、神木と勝呂とカナメくらいだった。
疲れているらしい朴に神木がお風呂に誘う。
“お友達”の杜山も反応してついて行った。

「うはは、女子風呂か〜。ええな〜。こら覗いとかなあかんのやな

いんですかね」

「志摩！お前、仮にも坊主やろ！」

「そんなん言うて2人とも興味あるくせに～～」

覗きの企みをする志摩に、勝呂と三輪が待ったをかけるも、あまり効果は得られなかった。

「女子の前で、よく声に出して企めるよね」

「あ」

カナメがそう言うと、志摩が固まる。
呆れ顔に隠れきれず、軽蔑の色がはみ出していたからだ。

「大丈夫。言わないでいてあげるよ。…さて、ボクもお風呂に行こっかな～」

それは、完全に拒否を現していた。
一瞬、空気が凍り付き、しばらく沈黙が続いた…。

「カナメちゃん怖い…」

「お前がアホな事言うからやろ！」

廊下を歩く。
少し、違和感を感じながら浴場を目指した。

ふと足を止める。
つい最近に嗅いだことのある臭いに気付いた。

急いで踵を返し、雪男のもとへ走る。
同時に女子の悲鳴。
カナメの推測が確信に変わった。

「奥村先生！屍系（グール）の悪魔が…！杜山さんと神木さんと朴さんが危険です！！」

「なんですって！？」

「急いでください！」

「分かりました。すぐ行きます！」

雪男は対・悪魔用の拳銃を手に、急いで広間を出て行った。
勝呂達もつられて駆け出した。

広間に残ったカナメは、誰かに声をかけた。
『何の遊びですか？』との問い掛けに、返事はなかった…。

「なるほど…ね」

そう呟いて、雪男達の後を追うように走り出した。

「あの子の勘もたいしたものですね。流石、あの男の娘だ…」

カナメが浴場に辿り着いた時には、既に事は済んだ後だった。
魔障を受けて倒れる朴以外、怪我をしている人間は見当たらなかった。

その朴も、杜山の処置を受け、死を免れていた。

「勝呂くん、朴さんを部屋まで運ぼう。志摩くんには任せられない

…」

「カナメちゃん怖い…」

「……」

現在、１３：０５。

本日、平日……つまり、寝坊。

「……あ〜……」

目を擦り、顔を洗いに洗面所に向かう。
見事なまでに跳びはねた髪を手ぐしで直す。

「んー…。奥村先生、怒ってるかなぁ……」

どうせ怒られるなら、とことんのんびりしてやろう。

日課の散歩をしながら、歩いて塾へ向かう。
塾に辿り着いたのは、聖書・経典暗唱術の授業が終了したあとだった。

教室に入ると、何やら揉めているようだった。

「この……っ」

カナメの目に映ったのは、勝呂が神木の胸ぐらを掴んだ瞬間だった。

「待って！」

カナメの制止も叶わず、反射的に出た腕は、間にいた燐に命中した。
ただ……運悪く、その場に現れた雪男に見つかってしまった…。

夕暮れ時、寮の一室に集められた塾生達は正座をさせられ、その足には人面岩の悪魔が乗せられた。
この悪魔、時間が経つと共にどんどん重くなっていく…。

「皆さん、少しは反省しましたか」

雪男は呆れた様子で尋ねる。
志摩は、自分達にも罰が与えられているのか不思議なようだった。
それについては、雪男が『連帯責任です』と答えた。

「それに…五十嵐さん、時間は守ってください」

「すみません…」

「この合宿の目的は“学力強化”ともう1つ“塾生同士の交友を深める”っていうのもあるんですよ」

溜息混じりに言うが、神木は反発する。
再び揉めだすかとも思えたが、雪男の言葉でそれもなくなった。

「馴れ合ってもらわなければ困る。祓魔師は、1人では闘えない！」

基本、祓魔師は2人以上の班（パーティー）で闘う。
お互いの特性を活かし、欠点を補うためだ。
実戦中、仲間割れなどすれば今より更に重い連帯責任を負わされる。
運が悪ければ、死ぬことだってさえ有り得る。

「…では僕は、今から3時間ほど小さな任務で外します。……ですが、昨日の屍の件もあるので念のため、この寮全ての外に繋がる出入口に施錠し、強力な魔避けを施しておきます」

「あの～……まさか、3時間このままですか…？」

「はい。“皆で仲良く”頭を冷やしてください」

脳裏に浮かんだ悪魔のような一言を、雪男はニッコリと微笑んで口にした。
その背後には、僅かな怒りが見え隠れしているようだった。

「うわー…鬼だな……」

「お前とあの先生、ほんま血ィつなごうとるんか」

「…ほ…本当はいい奴なんだ…きっとそうだ」

さて、カナメがあることに気付く。
あの臭いが、漂っているのだ…。

そして、この部屋にも若干の違和感を感じ取っていた。
人の気配が多過ぎる…。

「つーか、誰かさんのおかげでエライめぇや」

「はあ？あんただってあたしの胸ぐら掴んだでしょ！？」

「先にケンカ売ってきたのはそっちやろ！」

「ケンカしてる場合じゃないかもよ」

「「は？」」

カナメの忠告に、２人は首を傾げる。と同時に部屋の明かりが消えた。

一瞬の出来事に驚き、皆混乱する。
その混乱を打ち消すように、志摩が携帯を開き明かりを点した。
真似するように、それぞれ自分の携帯を開いていく。
少しは明るくなったことで落ち着いたようだ。

「停電…！？」

「いや窓の外は明かりがついてる」

「停電はこの建物だけってことか…？」

志摩は立ち上がり、ドアへと向かう。

「フフフ。俺こういうハプニング、ワクワクする性質（たち）なんやよ。
リアル肝試し……」

少し傷んだドアは、掠れたような音をあげながらゆっくりと開いていく。

「……」

携帯の僅かな明かりに照らされた物体を目の当たりにし、ゆっくりとドアを閉めた。

それは、明らかに人間ではなかった。

「…なんやろ、目ェ悪なったかな…」

「現実や現実！！！！」

「志摩くん！逃げて！！」

うおぉぉ！と、声に出しながら跳びはねるように逃げる。

同時に、人間ではない腕がドアを突き破った。

獣のような気味が悪い声を発しながら、硫黄臭を撒き散らして屍（グール）が現れる。

その姿は、継ぎ接ぎだらけの顔や体をしており、頭の横にはもう1つ継ぎ接ぎされた頭のようなものが生えていた。

更に、その後ろからもう1体の別の屍……。

「昨日の屍…！！」

「魔除け張ったんやなかったん！？」

その大きさからするに、おそらく中級以上の悪魔だと思われる。
それが2体も現れ、足も痺れて動けない。
屍は、継ぎ接ぎの糸を自らちぎるように頭を膨らませる。
ボンッ、という音と共に体液を振り撒き、塾生達にそれを浴びせた。

「ニーちゃん…！ウナウナくんを出せる？」

杜山の問いに応えるように、使い魔のニーちゃんはその小さな体から巨大な大木をバリケードのように張り巡らせた。

「す…すげぇ…」

「ありがとね、ニーちゃん！」

バリケードのおかげで、悪魔がすぐに襲いかかることはないが、ほとんどの塾生達が体の不調を訴えた。

原因は、先程の屍の体液。
これが体にかかると、風邪に似た症状になる。
問題なのは、これで杜山の体力が尽きれば、目の前の木のバリケードが消えてしまう…ということ。

「すごい勢いでこっち来てる…！」

「屍は暗闇で活発化する悪魔やからな…」

カナメは体液を被っていたが、皆のように体調不良にはなっていなかった。
燐も同じだったようで、バキバキと音をさせながら近付いてくる屍を見つめていた。

「俺が、外に出て囮になる。2匹ともうまく俺について来たら、何とか逃げろ」

「奥村くん…！？」

「…ついて来なかったら、どうにか助け呼べねーか明るくできねーかとかやってみるわ」

勝呂が制止するが燐は聞く耳持たず、入り組んだ木のバリケードを進んで行った。

「バッ、おいッ！奥村！！戻ってこい！！」

無謀とも言える行動。
下手をしたら死んでしまうかもしれない。
祓魔師になる前に、死ぬのは避けたいはずなのに、燐は迷わず進んで行く。

「…てめーらの目的は俺たろ！来い！！」

屍は不気味な声を張り上げる。その体は2つに裂けていく…。

「分裂！？」

燐について行ったのは分裂した片方だけ…。
結局、2体の屍がその場に残っていた。

そして、杜山の疲労も見て取れた。
このまま……という訳にはいかない状況。

「…ボクも行って来る」

「はァ！？何言うとるんや！五十嵐さんまで奥村みたいなバカの真似せんでええ！！」

「大丈夫。ボク、経験者だし勝算はあるから…」

1体でも減れば、皆の生存率も上がる。
“奥村くんも同じ事を考えてたのかな…”などと思いながら、木のバリケードを進む。

「コラッ！帰ってこい！」

「……もし、もう1体残ったら…勝呂くん、頼むからね。皆を守って…！」

「五十嵐……」

「さあ、来い！」

カナメの声に気付いた屍が、走り行く背中を追いかける。
数は1体…。

「くそ…。やっぱり、誰か操ってるな…」

体は頑丈で力もある。
だが、知性はない。いわゆる、筋肉バカである。

しかし、カナメと燐を追う屍は違う。
エサを目の前にして、追うやつと残るやつに別れて行動している。
本来なら燐が出て行った瞬間、全ての屍が追っていたはずである。

「“母なる海より生まれし火炎、我が名に応じ出よ”……不知火(しらぬい)！」

皆のいる部屋から遠く離れた場所に着くなり、召喚を行う。
不知火と呼ばれたソレは、カナメの手の平の上でゆらゆらと揺れていた。

不知火の眷属は『火』。
『腐』の眷属である屍の弱点でもある。
カナメの言っていた“勝算”とは、この事だった。

「君の力を少し借りるね」

カナメはそう言って、不知火を体の中へと吸収させていく。

完全に入った瞬間、カナメの体に炎が燈った。
朱い炎…それは、不知火の炎と同じ色だった。

「さて…君程度ならこのくらいで調度いいかな。日本では許された『称号』だし、使っても文句はないはずだ」

更に、カナメは鎌鼬も召喚して体に取り込んだ。
カナメの腕は、手首から先が刀身へと変化していた。

朱く燃える剣に怯えた様子で、追っていた屍の動きが止まる。
その隙を逃さず、次の瞬間には屍の体は2つに裂かれ、炎上していった。

『称号』

紅い空。父親の後ろ姿。

生まれて初めて見た景色、人…。その全てが『恐怖』だった。

幼いながらにして、そう感じたのは母親の血のせいだろうか。

ただ、そのおかげで髪は白くなり、二度と黒髪は生えなくなった。

自分が何者か知った時、心に決めた事がある。

現在、その第1段階を進んでいるところだ。

母親と同じ祓魔師になる事。そうなった上で、父親と再会する事。

そのためにも、目の前の敵を速攻に片付けなくてはならない。

父親のおかげで身につけた、自分だけが持つ『称号』。

カナメはそれを『憑依騎士(スピリット)』と呼んだ。

一方、残った塾生達は…。

「うわ〜〜！！とうとうここまで来た！」

屍は木のバリケードを徐々に削り、ついには片腕を出しすぐそこまで来ていた。

だが、今まで何もしていなかった訳ではない。
屍が近付いて来る間、ずっと詠唱を唱えていた。

悪魔には“致死節”という弱点があり、屍系の悪魔は“ヨハネ伝福音書”に致死節が集中している。

全部で二十一章。
それを全て暗記している勝呂が、詠唱で倒すと提案したのだ。

一章から十章まで暗記している三輪と共に、詠唱を続けているところだ。
既に最終章に入っている。

「奥村くん達どないならはったろ…」

「か…考えたないなぁ」

戻らない2人が心配になり、三輪と志摩が呟いた。
その横で、杜山が倒れる。
力尽きたらしく、屍の侵入を拒んでいたバリケードが消え去ってしまった。

志摩は、万が一のために取り出していたキリクを構え、屍よりも先にその体を突いた。

「…“稲荷神に恐み恐み白す…！”」

神木が2体の白孤を召喚する。
屍は、自分を殺そうとしている勝呂に一直線に向かっていた。
そこに2体の白孤の術が決まる。

「やった……！？」

そう簡単にはいかない。
一瞬の足止めにしかならなかった。
勝呂はまだ、詠唱を止めていなかったのが幸いだった。
屍は獣が苦しんでいるような声ん張り上げ、勝呂の頭を掴んだ。
それでも、詠唱を止めることはいなかった。
あと少しで唱え終える。
悪魔を目の前にして、さぞかし恐ろしいだろう…。
それでも詠唱を続ける勝呂へ、天からの助けか、はたまた神の悪戯か…。

「電気が…！！」

明るくなった部屋に、一番とまでっていたのは屍だ。
勝呂を持ち上げていた腕の力が弱まった。

「“…その録すところの書を載するに　耐えざらん！！！！！”」

全てを唱え終えると、屍の姿形は跡形もなく消え去っていた。
勝呂はしばらく震えていた。

「し…し…ししししぬしぬしぬし……」

『死ぬかと思った』という言葉がなかなか出ない。
廊下の方から、ドタドタと駆け足の音が聞こえ、皆の前にほぼ無傷の燐が現れた。

皆、死に直面していた分、燐が無傷で現れたのに絶句した。

「おおお、おま……もう1匹は……」

「え…？ああ、倒した！
お前らも倒したのか？スゲーじゃ……フンブ！？」

ニッコリと笑った燐の言葉が途切れる。
びっくりした勝呂が、ラリアットを繰り出したからである。
あまりの衝撃に、燐は後方に吹っ飛んだ。

「なん…なんやお前、なんて奴や！！！！死にたいんかーーーッ！！！？」

「何しやがるッ！？」

「俺は死ぬとこやったわ！」

「意味分かんねーよ！」

そして、カナメの方にも変化があった。
召喚した2体の使い魔を消滅させ、燃え尽きて炭になった屍の残骸を冷ややかな視線で見つめている。

「……皆、大丈夫かな。死んでないといいな…」

だらりと力が抜けた様子で、炭になった屍を踏み付けて前に進む。
久々の自分の能力に疲れたようだ。体を動かしているというのに、睡魔がカナメを襲う。

しばらく進んでいると、廊下に明かりが点った。
燐の方が上手くやったのだと感づいた。
不意に笑みがこぼれた。

「流石だなぁ…」

そう呟いて、ふと顔を上げるとドアが壊れた部屋があった。
その中から勝呂と燐の声が聞こえる。
どうやら無事だったようだ…。

「ただいま〜…」

倒れている燐を見て、目を白黒させている他の塾生達を見て、笑顔を作って言う。

「よかった〜、皆も無事…だっ……た…」

姿を確認して安心したのか、カナメは膝から崩れた。

「カナメッ！？」

完全に崩れ落ちる直前に受け止められる。
その後から、カナメの意識は遠退いていった。

「……」

「目ェ覚めたか？」

「……んー…」

カナメは目を擦りながら体を起こした。
すぐ隣に勝呂がいる。

「あ、試験終わった…？」

「知っとったんか！？」

「なんとなく…。人の気配は多いし、あの屍は確実に操られてるし…あの理事長なら考えそうな事だし」

カナメが辺りを見渡すと、誰もいなかった。
窓の外も暗闇に包まれていたし、時計の針は1時を表している。

「待っててくれたの…？」

勝呂に尋ねる。
本人は顔を背けながら、少し照れた様子で頷いた。

「な、何笑ォとるんや！」

思わず笑ってしまい、勝呂に注意される。
カナメは、謝りながらも笑っていた。

「ごめん…つい…」

「笑うな！」

「ちが…っ……嬉しくて、つい……」

笑いが止まらず、涙まで出る始末。
勝呂も諦めたように溜息をついて、カナメの頭を撫でた。

「頑張ったな…カナメ」

「ありがとう」

「アインス、ツヴァイ、ドライ☆」

ポン！と垂れ幕やらクラッカーやら紙吹雪やらが飛び、白にピンクを合わせたスーツの理事長がお祝いの言葉を言った。

「無事全員、候補生昇格…！おめでとうございま〜〜す☆」

ということで…と続け、もんじゃを御馳走すると皆を案内して行った。

正十字学園町にある駄菓子屋さん。
メフィストはチーズ豚もちもんじゃを頼むと、団扇を片手に外へ出る。

そこで待っていた雪男と何やら話し込む。
雪男の表情は険しく、怒っているように見えた。

「奥村先生、飲み物何にするのかな？」

「先生ェ、ラムネでええですかぁ？」

「はい。じゃあ、ラムネで。五十嵐さんはいいんですか？」

カナメは『猫舌なので…』と言って、雪男とすれ違う。

外に出ると、メフィストはどこかに電話を掛けていた。

「……操り人形（ネイガウス）に手引きさせる。詳しいことはまた後だ。いいな……」

話は終わったらしく、携帯を袂（たもと）にしまう。

ラムネを持ってメフィストに近付くと、逆に声をかけられた。

「久々の“憑依（ちから）”は疲れましたか」

「はい。……それに、嫌な夢も見ました」

「ほう…。父親の夢でも？それとも虚無界（ゲヘナ）の…？」

「どちらも、ですよ。……それと、ネイガウス先生にもボクの事を話ましたね？」

「ええ。でも、安心してください。君の事を知ってるのは奥村先生

と私だけになりましたから」

「それはそうと……もんじゃ、既に食べられてますよ？」

「え…ちょ…待！！貴方たち！？」

折角教えてあげたのに…。

と思うカナメに礼もなく、メフィストは好物のチーズ豚もちもんじゃを死守するべく、人間離れの意地を見せつけていた。

「いい風だなぁ」

カナメは、チリリンと鳴る風鈴の音色に耳を傾けてそう言った。

『称号』（後書き）

次は休憩（雑談）です。

お茶会（サボり）（前書き）

ようやく2巻の内容を書き終えたので
ここいらで、しばしの休息…

お茶会（サボり）

はいはーい。
お久しぶりです、作者でーッす☆
皆様に読んでいただいて、本当に嬉しい限りです。

早速出ました。
カナメの能力！憑依です！

些か『いや…これ、無理あるだろ～』とか言われつつ書いちゃいました。
え？
誰に……って？

誰でもないですけど。
もう1人の自分とですよ。
俺が邪餽なら、奴は珀磨ですよ！

奥村　燐
「何、熱くなってんだよ」

つい…。
文章力ないからか、感想1通もないんだもの……。

俺、淋しくて。

奥村　燐
「あ、そーだ！おい、お前！！」

お前とはなんだ失礼な！
これでも作者だぞ！
文章力低いが作者だぞ！

奥村　燐
「んなことはどーでもいいんだよ！なんで、元々の主人公の俺より、
勝呂の方が出番が多いんだよ！！」

…あ？
なんだ、そんな事か……。

奥村　燐
「そんな事じゃねー！なんで俺の勇姿を書かねーんだ！？」

勝呂　竜士
「奥村なんかよりは、俺の方がええ男やからやろ」

奥村　燐
「おわっ！？ちょ、お前！どこから湧いて出てきやがった！！」

勝呂　竜士
「人を虫ケラみたいに言うなや！ちゃんと、玄関から上がったわ！！」

わー…。
なんか、前回も同じようなのを見た気がする。
燐の質問、あえて言うなら文句のことだけど、しょうがないから我慢しろ。

奥村　燐
「えー、なんでだよ！？」

しょうがないだろ。
元々、カナメと勝呂ラブ×2計画を基に書きはじめられたんだから。
お前には、しえみがいるからいーじゃん。

勝呂　竜士
「ブフォッ……！？」

奥村　燐

「あー…邪餽って、勝呂好き？」

いや？
付き合うまでいかない部類かな。
俺が好きなのは、勝呂の中の人。

奥村　燐
「俺はー？」

えー。
お前は止めとくよー。
てか、中の人なら雪男の方が好きだもの。

勝呂　竜士
「ちょっと待て！話がそれとる！お前の出番の話やなかったんか？！」

奥村　燐
「そーだった！なあ、もう少し増やしてくれよー。五十嵐と勝呂の次でいいから～」

はいはい。
一応、検討してみましょ。

奥村　燐
「軽っ！？」

さて、ここでカナメに質問コーナー。
Q：五十嵐　要　という名前についてどう思いますか？

五十嵐　要
「なんか…男の子みたいな名前だな～、と…」

はい、その通り☆
最初は、男の子の予定でした。そこは珀磨と揉めまして……。

Q：両親は何の仕事をしてますか？

五十嵐　要
「母さんは祓魔師でした。もう亡くなってます。父親は今、何をしてるか知りません」

Q：毛先だけを染めたのはどうしてですか？

五十嵐　要
「髪全体を紫に染めたけど、白髪の伸びるスピードが早過ぎて…。毛先を染めたんじゃなくて、全体を染めた跡なんです」

Q：なんか早速、勝呂が“カナメ”と呼んでいますが……？

五十嵐　要
「嫌じゃないですよ。朝の散歩中にも仲良くしてますから」

ラブには程遠いな…。

勝呂　竜士
「お前から作者に質問はないんか？」

五十嵐　要
「んー…じゃあ、なんでこの小説をＵＰしたんですか？」

ほら、少し前にモ〇ゲーで青エクのゲーム出たでしょ？
あれをやり始めて、“あ、こんなんいいかも～”てな感じで書き始めたのがきっかけ。
俺の相棒（パートナー）は勝呂だぜ。

勝呂　竜士
「げェ……」

あ、その内２人には班（パーティー）を組んでもらうから。
そこでラブ率を上げる予定だ！！

では、そろそろこの辺で失礼させていただきます。

またお会いしましょー☆

来客（前書き）

これから、少しずつ更新が遅れていくかもしれません。できるだけ早く更新できるように頑張りますので、お付き合いいただけるととても嬉しいです。

来客

紅い空。父親の背中。
人間が住む物質界（アッシャー）ではなく、悪魔が住む虚無界（ゲヘナ）の風景。

カナメは恐怖で何も言えなかった。
目の前にいるのが父親であることさえ、嘘じゃないかと思いもした。
だが、それは現実で、抗うことが出来ない真実。

『お前は私の子。お前は……の……だ』

「違うっ！」

自分の声に驚いて飛び起きる。
乱れた髪をかき上げて、頬の汗を拭った。とても冷たい汗に、ドキリとする。

「また、あの夢か……」

「また故郷の夢ですか？」

「あんな所、故郷なんかじゃないですよ……って、何してるんですか？理事長」

「スト2です」

「誰も“何のゲームをしてるか”なんて聞いてません。“何でココにいるのか”と聞いてるんです…」

部屋には絶対ないゲームの山と、それに埋もれる白い紳士服の理事長。
カナメは叫び声の代わりに、呆れ声で理事長に尋ねた。
理事長・メフィストは、紙切れを渡す。

「その紙に書いてある場所まで行ってください」

その紙には、地図のようなものが書かれていた。
カナメは首を捻る。

「何故？」

「候補生（エクスワイア）の初仕事とでも思っててくれればいいですよ」

「初仕事が『お遣い』ですか……」

「はい。頑張ってきてください☆」

見事に波〇拳を決めて勝利を掴み取ったのか、メフィストは飛び切りの笑顔で振り向いた。

カナメは溜息と共に承諾し、地図の場所へと向かうことにした。

地図の場所は正十字学園町の中ではあったが、理事長使用の特別な鍵が必要な所のようだった。

「…めんどくさいなぁ」

「……」

「どうも」

「……帰ります」

カナメはげんなりした様子だった。
目の前の男が何者か知っていたからである。

「いいんですか。兄上に怒られますよー」

「うー…」

メフィストによく似た目つきをした男は、踵を返したカナメを足止めする。

『お遣い』…基、初仕事を放り投げれば罰を受けるのは間違いない。カナメは、しぶしぶ足を止め、再び踵を返した。

「理事長の結界でここには入れないはずでしょう。何故、こんな所にいるんですか…」

「兄上の知人に手引きしてもらいました」

「…何を考えてるんだか」

「ボクにも分かりません」

とりあえず携帯を取り出し、メフィストに電話をかける。長いコールの後、ようやく電話が繋がった。

『なんですか？』

どうやらゲームで負けたらしい。

第一声には怒りが込められていた。

「ボクに当たらないでくださいよ…。弟さんに会いました。これから、どうすればいいんですか？」

『あー。鍵を使って私の部屋まで案内してください』

メフィストは一方的に電話を切る。

「じゃあ、理事長の所まで案内します。ボクから離れないようにしてください」

「分かりましたー」

そう言ったものの、男は敷地内を動き回る。
仕方なく、メフィストから事前に受け取っていた飴玉を撒きながら進んだ。
男は、それを拾いながらついて来た。

「失礼します」

鍵を使い、ドアを開けるといつもの理事長室が広がっていた。
少し違うのは、不機嫌な理事長の姿くらいだ。

「また負けたんですか…」

「お久しぶりです、兄上」

明らか苛々した様子のメフィストに、恐れなしに声をかける。
カナメが『大人げない』と呟くと、それを否定するかのようにジェントルマンになりきり始めた。

「ようこそ、我が弟・アマイモンよ…。その口に含まれた飴玉の味はいかがかな？」

「ハイ、とっても美味しいです」

早速、挨拶を済ませると窓際まで移動する。
そこからは、道路と大きな猫の姿が見えていた。
男…基、アマイモンは指で輪を作り、それを覗くような格好で外の風景を眺めていた。
大きな猫の側には、何人かの人間がいて、見慣れた姿を発見する。

「奥村くん！？」

「おや、もう帰ったのかと思っていました。君も彼の“力”が気になりますか」

燐と雪男が前に出た。
やがて、大きな猫と燐に何かあったらしく、猫の方が先に倒れた。
メフィストとアマイモンはつまらなそうに眺めているが、カナメは違った。
燐らしくて面白い、と思ったのだ。

「いいえ。彼の“力”は本物ですよ。…今回は違いましたけどね」

メフィストは、ニィ…と笑う。

「なるほど。では、今回の仕事は終わりです。ご苦労様でした」

「じゃあ、また今度…」

「ハイ。さよなら、カナメ」

理事長室を出て、帰路をたどる。
今日は休日なためか、見るのは祓魔師の格好をした人間だけ…。
町に出れば他にも人はいるのだろうが、そんな気にはなりそうにもなかった。

「嫌な風…埃っぽい…」

そう呟くと、あの夢を思い出した。
紅い空と父親の背中…。
カナメの初めての記憶。
まだ、自分が普通の人間ではないと思いもしなかった頃の…幼い記憶。
足が止まる。

「…どうして、ボクなんだろう……」

夢の中で、父親が言っていた…。
『お前は選ばれた』。
意味はまだ、よく分からない。

「あ、課題まだだった」

ふと、明日の事を思い浮かべる。雪男に出された課題があったのを思い出した。

カナメは、今まで考えていた事は殆ど放り投げて、自分が寝泊まりする寮へと急ぐのだった。

数日後、候補生達が遊園地に集合させられた。
任務らしいが、内容はまだ知らされていない。

そーいえば…、と志摩が切り出した。

「皆さん、初任務どうしたはりました？」

それに勝呂がボヤキで返す。

三輪は蝦蟇（リーパー）のオリの掃除。

勝呂は山奥へ物資運び。

…と、皆雑務ばかりだったらしい。

尋ねてきた志摩も雑務だった、と語った。

「へっへっへ～～～♪」

皆が雑務だったと聞いて、自慢気に燐が切り出した。

「俺は、ひと足先に悪魔倒しちゃったぜ！しかも、その後、俺の使い魔にしたんだ！」

しばらく沈黙。

勝呂は信じられない、という様子だった。

「…まぁ、コイツは置いといて」

「オイ！嘘じゃねーんだぞ？」

「俺はあいつらまで候補生に上がりよったのが納得いかんわ！」

勝呂が言う“あいつら”とは、前に認定試験で何もしなかった山田と宝の事だ。

山田は常にフードを被り、手にはゲーム機がある。

宝は普段は無口…というより喋らない。手にはピンクのうさぎの人形を持っていて、時々、腹話術で話したりする。

どう見ても、真面目には見えないのだ。

「そーいや、お前はどーだったんだ？」

「ボクはお客を理事長の所まで案内しただけ」

「そんなもんかー」

「それより…他の２人は？」

そう。
この場には神木と杜山の姿がない。
何かの理由で遅れている…らしい。
何をしてるのかと、予想するよりも前に杜山の声が聞こえた。

「すみません！遅れました…！！」

「し、しえみ！？どうした？」

遅れて現れた杜山に、燐が驚いた様子で尋ねた。

驚くのも無理はない。
杜山は、いつもの着物ではなく、正十字学園の制服を着ていたのだ。
その意外な姿に、一同言葉を忘れる。

「着物は任務に不向きだからって…理事長さんに支給していただいたの…」

それで、学園まで行って神木と朴に制服の着方を教わっていたらしい。
ネクタイは結び方が覚えられず、蝶々結びになっていた。

「へ…変じゃないかな？」

杜山は少し恥ずかしげに尋ねた。
元々赤い顔に赤みが増しているように見えた。

「えーよ、えーよ！杜山さんかわえーよ☆」

志摩がいつもの調子で声をかけると、杜山の顔もみるみる赤くなっていく。
お礼を言った声が震えていた。

「えーでは、全員揃ったところで組分けを発表します。まず、三輪・宝。山田・勝呂。奥村・杜山。神木・志摩。…五十嵐さんは1人でお願いします」

それぞれ文句があったが、雪男は完全無視して話を続けた。

「今回はここ…正十字学園遊園地――通称『メッフィーランド』内に霊（ゴースト）の目撃・被害の報告が入ったため、候補生の皆さんにその捜索を手伝ってもらいます」

霊（ゴースト）とは、人や動物などの死体から揮発した物質に憑依する悪魔で、性質は死体の生前の感情に引きずられる特徴を持っている。

今回の対象になっている霊は、メッフィーランド内のいたる所で目撃されている。

しかし、出現場所を特定できないタイプで、浮遊霊の類だと思われる。

外見特徴は“小さな男の子”で共通している。

被害はまだ軽いが、このまま放置すれば悪質化する恐れがあるという。

「先程の組分けで方々に散り、日暮れまでの発見を目指します。見つけたらすぐ、僕か椿先生の携帯に連絡すること。

……では、他に質問がなければ――以上、解散！」

組分けされた４組は、園内に入って行きバラバラに散っていく。

カナメは埃っぽい風に咳込みながら、１人で園内に向かう。

「なんだか…嫌な予感がする…」

とりあえず、泣き声がする方へ歩いて向かうことにした。

進む度に騒がしくなる事に首を傾げていた。

メフィストの像の前まで来ると、誰かが揉めているようだった。

「奥村くん？」

「い、五十嵐…！？」

驚いて振り返った燐が見ていたのは、燐の刀を奪い取ったアマイモンの姿だった。
アマイモンは燐の刀に興味津々な様子で、その鞘を引き抜こうとしていた。

「や、やめろ！！」

燐の制止も意味なく、アマイモンは完全に引き抜いてしまった。
それと同時に、燐の体から青い炎が噴き出す。

「返せ！！」

奪い返すつもりで飛び掛かるが、着地点が悪かったらしくメフィスト像の首が崩れ落ちる。

「「あー理事長（兄上）の首が」」

カナメとアマイモンの声がカブった。
そこでようやくカナメの存在を思い出す。

「五十嵐…お、俺……」

「大丈夫だよ。ほら、早く取り返さなくちゃ」

「そうだ！…てめぇ、まじで何が目的だよ！」

扱いやすいなー…。
そう思うカナメの言葉にのせられて、アマイモンに視線を移した。

アマイモンは遊んでいるように燐を呼ぶ。
それは挑発に近かった。

「鬼さーん、こーちら♪手ーの鳴ーるほーぉへ♪」

アマイモンは“ＧＯ　ＴＯ　ＨＥＬＬ”の看板があるジェットコースターをよじ登る。
それを追う燐を待ち構え、デコピンで弾き飛ばす。

「わー…。壊しちゃったー…理事長、怒るだろうなぁ……」

瓦礫と紛れて、燐は落とされ、アマイモンは落ちる燐に拳を喰らわしていく。
燐は抵抗できず…額からは血も出ていた。
燐がキレるのは時間の問題だった。

「ガアアア！！」

まるで獣のように、アマイモンに逆襲する。
地面に着いた瞬間から燐の暴走が始まった。
アマイモンを投げ飛ばし、更に押し倒して炎を放出させる。
肌が焼けていくのに恐怖を感じるはずなのに、アマイモンは笑っていた。

「“我が名に応じ、姿を現せ。我、汝と共に戦いし風の者なり”――憑依・鎌鼬！！」

アマイモンが起こした地震に足を取られ、上から降ってくる瓦礫から避け損ねた杜山の援護に回る。
杜山の使い魔も、護ろうと大木を出そうとするが間に合いそうにもない。

「杜山さん、伏せて！“風雅！”」

「助けて！」

カナメに言われた通りに体を伏せる。
恐怖が強かったらしく、杜山は思わず助けを求めた。
鎌鼬の能力で起こした風で、少しは瓦礫の落下を減らしていたが、
杜山の声で燐の暴走が止まった。
ただ、杜山を助けたい一心で青い炎を瓦礫に向ける。
カナメの風の援護もあってか、炎は大きな渦となって瓦礫を燃やし
尽くした。

「杜山さん、大丈夫だった！？」

「…え？」

「大丈夫みたいだね。じゃ、ボク行ってくるから！奥村先生に連絡
してて！！」

まだ呆然としている杜山に声をかける。
あまり耳に入っていない様子だが、大丈夫だろうとその場を離れる。

向かうのは、落ち着きを取り戻した燐と退屈してきたアマイモンの所だ。

「邪魔だなぁ」

アマイモンの呟きが聞こえるくらいの所まで来ると、人が1人増えている事に気付いた。

「邪魔はお前だ」

アマイモンは無言だが、どう動くか分からない状態だった。

「もうすぐ人がきますよ？降魔剣を奥村くんに返してください」

「……では、またの機会に…」

アマイモンは剣を鞘に納めると、燐に向かって投げ返した。
そして、ぴょーん、と飛び去って行った。

「待てコラ！…お前、余計な事を…！おい！その尻尾は隠しておけよ！！」

炎も治まり、疲れがでたのか燐はしばらく呆然としていた。
言われた通りに尻尾は隠して、何かを考えているようにも見えた。
少し後に杜山も駆け付け、その後から雪男が椿を連れて駆け付けた。

「大丈夫ですか！？」

「遅ぇぞ雪男」

アマイモンを追いかけて行ったはずの人間が戻って来ていた。
それが山田だとすぐ気付いたが、声が女性なのに疑問を感じる。
一気にフードを脱ぎ捨てる山田には、ふくよかな胸が2つついていた。

「アタシは上一級祓魔師の霧隠　シュラ。日本支部の『危険因子』の存在を調査するために――正十字騎士團、ヴァチカン本部から派遣された上級監察官だ」

山田だった女性は、霧隠と名乗り、祓魔師の免許証と階級（バッチ）証を見せながら言った。
嘘をついてる様子はない。が、上一級祓魔師とは思いがたい態度だ

った。

「とりあえず、コイツとソイツを日本支部基地に連行する」

霧隠はそう言うと、燐とカナメの腕を掴んでどこかへと向かって行くのだった。

.

目指すモノ

「皆さん、今日の任務はひとまず解散です。寮に戻って下さい…」

燐、カナメ、山田、杜山以外の塾生たちはメッフィーランド入口で集められ、雪男から解散の指示を受ける。

そこを横切るのは、霧隠に引きずられた燐とカナメ。

それを追いかける杜山の姿があった。

「カナメはともかく、奥村は何かやらかしたんか？」

「あのお姉様、誰！？」

「あ！…あんた！何が一体どうなってんの？」

皆、混乱していた。

霧隠は構わず進んで行く。

燐とカナメも、黙ってついて行くだけだ。

「ど…どこに行くんだ！？」

しばらく歩いて、メッフィーランド入口付近にあるスタッフ専用入口で足を止める。
燐は、こんな場所からどこへ向かうのか想像もつかなかった。
同伴している雪男が鍵を開ける。
ゆっくりと開いた先は、もうメッフィーランドではなかった。
広い空間。高い天井。長い道。

「ここは、正十字騎士團の中枢。日本支部は学園の地下を基地にしている。表向きは知らされてはいないけど、世界中に支部を持つ国際組織……ですよね？」

「ああ、そうだ。歴史も古くてな…2千年以上も大昔から世界中のバケモノ退治を担ってきたんだ」

長い道を進みながら説明していると、白とピンクが目立つ服の男の姿が見えてきた。理事長・メフィストだ。
霧隠に軽い感じに挨拶をする。

霧隠もメフィストを呼び捨てにして、言葉を遮った。

「本部に黙ってサタンの子とその血を引く者を隠しやがって…単刀直入に聞く。お前、一体何を企んでいる」

「企むなど滅相もない。確かに隠してはいましたが、全ては騎士団の為を思ってのこと…」

余裕の表情だったメフィストに気迫を感じた。
更に、こう続ける。

「サタンの子とその血を引く者を騎士団の武器として育て、飼い馴らす…！…この2千年、防戦一方だった我々、祓魔師に先手を打つ機会を齎すものです」

メフィストは『綺麗に仕上げてから報告するつもりでした』と説明する。

霧隠は、どのみち本部には報告するらしい。

「その前に、コイツら尋問するから大監房を使わせてもらうぞ」

「ご自由にどうぞ」

「おい、チビっ子。お前からだ」

霧隠はカナメを指名する。
拒否権のないカナメはそれに従うだけだ。
引きずられるように連れて来られたのは、上級祓魔師以上でなければ使用することができない監房。
重くて分厚い扉を閉めると、ごおぉぉ……ん…と音が響いた。

「さて、聞かせてもらおうか。お前、一体何者だ？」

「五十嵐　要です。今は候補生ですよ」

「『今は』？」

「特殊『称号』の祓魔師候補。それが去年までのボクの肩書きでした」

「聞いたことはある。悪魔を自ら憑依させて、その能力で戦うという…」

「そう、それです」

最初から警戒していたが、カナメが憑依騎士だと認めた途端、更に警戒を増した。

「もう一度聞く。お前は何者だ？」

「ボクは、悪魔と人間の間に生まれた混血児。母は陰陽師・五十嵐流３８代目継承者…五十嵐　円。父は八候王（バール）の１人、嵐の王・セト」

カナメは、服の下からヒョロリと伸びた尻尾を見せながら言った。それは悪魔の証。

「憑依騎士の事を聞いた時、おかしいと思ったんだ。『人間』は“憑依できない”！！」

霧隠は体内から魔剣を召喚し、カナメに敵意を向けて構えた。

「確かにボクはサタンの血を引いていますが、あの人の野望とかどうでもいいんです。むしろ、母と同じ祓魔師になりたいですし…」

「…祓魔師の武器になってもか？」

「ボクの目標は、もっと先にあるんです」

「……」

カナメに敵意はない。
体とは裏腹に、精神（こころ）は『人間』なのだ。

父親譲りの紫の瞳は、敵意で満ちた霧隠を見る。
睨んでいるのではない。
ただ、優しい眼差しを送っているのだ。

「…しばらく監視させてもらうからな」

「どうぞ」

「……はぁ」

霧隠は深い深い溜息をついて魔剣をしまう。
再び、重くて分厚い扉が開き、今度は燐と入れ替えられた。

「お帰りなさ～い☆」

メフィストがそう言って迎える。
側には雪男の姿もあった。

「バレちゃいました」

「それでシュラは何と？」

「しばらく監視するそうですよ」

メフィストは静かに『そうですか…』と呟いた。
雪男はカナメの姿が少し違っている事に気が付く。
カナメの服から飛び出す尻尾に気が付いたのだ。

「奥村先生、今まで1人での監視お疲れ様でした。…これからは、霧隠さんがボクを監視します。詳しい事は、理事長にでも聞いてください」

「…え！？フェレス卿！どういう事なんですか！！」

一瞬の間の後、詰め寄るように尋ねる。
メフィストは動揺した様子も見せず、ただ口の端を吊り上げて屁理屈をこねた。

「聞かれなかったので、言いませんでした」

「…まあ、この先も他の皆には内緒の予定なので、あまり現状は変わりませんよ」

「そういうトコロも父親と似ているな…」

「えー…」

カナメは、とてつもなく嫌そうな顔をしていた。

正十字学園町最上部、ヨハン・ファウスト邸。

「上への報告は保留にする。だが、奥村　燐と五十嵐　要の監視は続行する。…つーワケで、日本支部内にアタシの居場所を用意してくれ」

「…判りました」

広い部屋。
客用のフカフカした椅子には霧隠。
ホスト用のデスクと椅子にはメフィスト。
小さな机の上には、壺に活けられた草花と散乱したお菓子のクズやゴミ…。

霧隠は椅子に腰掛け、足を組んだ格好をしている。
メフィストは、それを注意することなく『正十字学園局地地震被害報告』と書かれたファイルを開いて、頬杖をついた格好で読み進めていた。

「何にせよ、日本支部としては貴女のような優秀な祓魔師がいてくださるのは大変心強い」

そう言われて、霧隠は軽く鼻で笑った。

「話は終わりだ」

「オヤもうお帰りですか」

紳士らしく、優しい口調で語りかける。
が、それが逆に変に思われたのか、霧隠はドアの前で足を止めてしまった。

「……メフィスト。
お前、いったい何を企んでいるんだ？」

「…私は……人間と物質界の平和を企む者です。
そのために、虚無界を捨て正十字騎士團にいるのですから☆」

しばらく間が空き、霧隠はやはり鼻で笑う。

「お前が悪魔である以上、上はお前を信用してないって事を忘れるなよ」

冷ややかな視線を送り、霧隠は出て行った。

翌日。
早朝５：００時。

「……」

無言のまま体を起こす。
習慣になった散歩に今日も出かける。

「……はぁ」

散歩中に出てくるのは溜息ばかり。
何故だか、不思議なくらい落ち込んでいた。
カナメはその理由がみつからず、更に溜息を吐いた。

「……はぁ」

「カナメ！」

「はぇっ！？」

聞き慣れた声に振り返ると、勝呂が駆け足で近付いて来るのが見えた。
いつものように、Tシャツに短パン、耳からはイヤホンのコードが垂れている。

「お、おはよう…」

「ん。おはよう。…なぁ、昨日のアレ、なんやったんや？」

「ちょっとトラブルがあって…。それに巻き込まれたというか、突っ込んだというか……」

「はあ？」

カナメの説明に、勝呂は首を傾げる。
カナメ自身も今、何を話しているのか理解しきっていない。

「なんや…知らんのか」

「う、うん。まだ、ちょっと混乱してて……」

話が終わる。
気まずい空気から逃げるように、勝呂は再びジョギングを始めた。
いつもと同じはずなのに、何か様子が違う。
勝呂がそう思っているのと同時に、カナメも同じ事を思っていた。

「……はぁ」

「…つーわけで」

ほぼ下着のような露出の多い服を身に纏った、講師とは思えない霧隠の姿が教室内にあった。
教壇に腰掛け、ムッチムチの脚の網タイツがやけに色っぽい。

「この度、ヴァチカン本部から日本支部に移動してきました。霧隠シュラ、１８歳☆でーす」

霧隠は『はじめましてー』と挨拶する。
とは言っても、元『山田』だ。

2ヶ月半、一緒に授業を受けていた人間である。
それは霧隠も軽く笑いながら昔話のように語る。

「えーと？とりあえず“魔法円・印章術”と…？“剣技”もかよ、めんどくせ！
…受け持ちますんで、よろしくー」

霧隠は、何もなかったかのように話を進めるが、勝呂が気になっている2つの質問を挙げる。

“何故、生徒のフリをしていたのか”。
“魔印の担当だったネイガウスはどうしたのか”。

霧隠の答えは、どちらも“大人の事情”だった。
もちろん納得いくはずもなかったが、話を遮るようにか細い声が割り込んでくる。

「スンマセン……。その…ブツブツ、ブツブツ……」

一生懸命、言い訳をしている燐に、霧隠は入室を促す。
霧隠が教室にいることを驚いていたが、すぐに着席と教科書の朗読を命じられ、言われた通りに行動した。

「何か雰囲気変わったんやないか？」

「…何かあったんかもしれませんねえ」

「志摩くんが考えてるような事はなかったと思うよ」

「カナメちゃん、ヒドイ…」

「私語は謹めー」

他愛のない日常。
これが普通の日常。
例え、己を偽り、他人に嘘をついた偽物でも、それが普通ならば守る。

そう考えるカナメとは逆の事を、実行しようとしている者がいるとは、今はまだ考えてもいなかった。

.

過去

「お父…さん…？」

「我が名はセト。神と崇められ、悪魔へと堕ちた嵐を起こす者…」

「お父さん……お母さんは…？お母さん、消えちゃったの…。風みたいにフワッ…て」

「母は、もういない」

「なんで？！…ここは、どこなの……！？」

「……」

「お父さん！！！！」

「……」

紅い空。

それ以上、何も語らなくなった父親の背中…。
幼いながらに感じる『恐怖』に、体を震わせ父に尋ねる。
尋ねる声も震えている。

「ボクは…普通じゃないの？なんで、尻尾が生えてるの？ボクは何なの！？」

「…お前は、選ばれた。……が……の……」

「嘘だ！ボクは……祓魔師になるんだ！ボクは、悪魔なんかじゃない！！」

「……また……」

カナメは、うんざりした様子で乱れた髪をかき上げる。

「最近、多いなぁ…。“憑依(ちから)”の使いすぎかなぁ」

祓魔塾に入ってからというもの、やたらと“憑依”を使う機会が増え、その度に動けなくなる。
あまりにも機会が多いためか、体が“憑依”に慣れ始めているくらいだ。

「ところで…」

とりあえず、ズボンを履き替え、上着を着替えながら部屋の隅で悔し涙を流す男に声をかける。

「勝手に入っていじけないでください。てか、アマイモンから目を離さないでくださいよ…」

「あいつなら大丈夫です。私の知人に頼んであります……しくしく(／＿；)」

「今度はどうしたんですか？ボクのスコアが越えられないとかですか？」

「……はい。テト〇スの」

「……はぁ」

溜息を漏らすカナメ。
しくしくと泣き続けるメフィスト。

今回は、そんな2人が初めて会った時の話を振り返りたいと思う。

あれは、１０年程前。
まだカナメが幼稚園に通っていた頃の話。

「悪魔の子だ」

「おそろしい」

「五十嵐流も堕ちたな…」

幾多の小声の罵倒が、幼いカナメを襲う。
大人達が、何故冷たい目で見るのか、冷めた口調で話すのか…いくら悩んでも答えは出て来ることはなかった。

上一級祓魔師であり、五十嵐流陰陽師継承者であり、母だった円（マドカ）。
彼女が愛したのは、セトという名の神だったもの。
カナメを身篭るまで、悪魔である事は隠していた。

マドカは、カナメを産んですぐ死んだ。
体が弱かったせいなのか、悪魔としてカナメを産んだせいなのか…。

何が善くて、何が悪い事なのかも分からない幼子に、親類や他の陰陽師からは冷たく扱われた。

しかし、陰陽師の能力は天性の才と讃えられた。
僅か3歳で式神の召喚。
特に、風を操る式神の召喚はマドカ以上と謳われた。

そして…もう1つ。

悪魔が必ず行う“憑依”も幼くして力を発揮していた。
母親の姿も見えていた。
それが霊(ゴースト)だとは思いもせず、母親として慕い続けていた。

「お母さん！今日ね“しらぬい”と遊んだの。“かまいたち”はね、今日はなんだか元気がなかったんだ…」

目の前の母親に声をかける姿は、他の子供達には『変』に見えた。
祓魔師や陰陽師達には見えているが、それ以外には見えないモノ。
だからこそ、子供達からも大人達からも遠ざけられ……いつも1人だった。

「あ、お父さん！」

悪魔の父親。
それだけで、人々は恐怖した。カナメも同類であると、勝手に決め

た。

「その人、だぁれ？」

白とピンクの印象的な服に、それに合わせたような帽子と傘。
目つきは悪く、目の下のクマは寝不足を遥かに超えているようだった。

「初めまして☆私はメフィスト・フェレス。このセトの兄です」

「お父さんの…お兄ちゃん…？」

「はい☆」

父が連れて来た人物に、違和感を感じていた。
人とは違う、父に似た異様な雰囲気を幼くして肌で感じ取っていた。

「あなた達に会えて、嬉しく思いますよ。
まさか、悪魔に憑依出来る人間がいるとは思いもしませんでした」

メフィストはカナメを見つめて語りかける。
当の本人は、戸惑いを隠せず父親の足に隠れた。

その様子を見て、クスッ…と笑う。

「あまり娘をイジメないでやってくれないか。見ての通り、この子は人見知りでね……自分で召喚した使い魔しか友人はいないんだ」

「ほぅ…もう、召喚が出来るのか。今、どのくらい友達がいるのかな？」

「……」

カナメは、小さな指をパッと開いて見せた。
両手で。

さすがのメフィストも、それには驚いた。
わずか６つの幼子が使役する使い魔の数には多過ぎるからだ。

「素晴らしい！将来が楽しみですね」

「ボク、えくそしすと？になるの！それでね、みんなを笑顔にしたいんだ」

「その時は私の所に訪れなさい。君を立派な祓魔師にしてあげますよ」

メフィストは別れを告げ、五十嵐流の本堂に向かって行った。
父はそこで見送り、カナメと共に離れにある屋敷へと帰る。
その帰り道でカナメは尋ねた。

「お父さん、あの人…ボク達が見えてるの？」

「そうだよ。彼にはお前達が見えている。
人間には見えない、私達しか見ることができないモノがね……」

カナメは、ふぅーん…と素っ気ない返事をする。
意味を理解仕切れていないと悟ったのか、セトは笑うのを押し殺していた。

「お母さん、どうして泣いてるの？」

「…そうだな。その“時”は近いようだよ、マドカ」

「？」

カナメを挟んで会話する両親を、訳も分からず見上げて首を傾げる。

この時は、まだセトが言った“その時”というものが迫って来ているなどと気付きすらしなかった。

その頃、本堂では…

「では、皆様の決断は“ソレ”でヨロシイのですね？」

メフィストの言葉に、本堂に集まった親戚一同は無言で頷く。
その中の代表者と思われる男が立ち上がり、メフィストに宣言する。

「我々の一族に悪魔はいない。あの子の存在は、消さねばならない！」

「分かりました。では、あの子は『悪魔』として我々が対処しましょう。
……最後にお尋ねしますが、本当にヨロシイのですね？」

「ああ。
我々の意志は覆らない！」

メフィストは“分かりました…”と呟いた。

“その時”がカナメ達に近付いていた…

それを察知したのか、セトが動いた。
カナメを避難させる為、一次的に異空間への扉を発動させる。

「お母さん！？」

マドカが頭を抱えて倒れ込む。
外からは、お経のような声が谺(こだま)のように聞こえてきていた。

「“稲荷の神々に崇められし、尊きモノに畏み申す！我、風の者！汝の炎の糧にならん！！”」

札のような物に文字が書かれている。
カナメが召喚を行うと、そこから火炎の渦を巻きながら、九本の尾がついた白銀の狐が降り立った。

「お母さんをイジメるなぁ！！」

カナメは声が聞こえる方に向かって叫んだ。
狐は、その声に導かれるように、巨大な炎の玉を吐き出す。
炎の玉は渦を描きながら球体を保ち、外にいた黒服の男達に命中する。
その男達の後方には、つい先程見たことのある男がいた。
先程とは違う笑みを浮かべながら、再び立ち上がる男達を誘導して、お経を唱え始める。

「炎孤（えんこ）！」

カナメは、もう一度炎の玉を放つ。
先程よりも強力に見えたが、一瞬にして消滅する。
おそらく、聖水の類だと思われるがカナメには不思議でしかなかった。

「カナメ、お前達はあっちに行ってなさい」

セトは、やや強引に突き飛ばす。
小さくて軽い体は、吸い込まれるように異空間へと飛ばされた。

「マドカ、あの子達を頼む。――君の事は、今でも愛しているよ」

『行け』と言われ、かつての夫と別れる。
その眼には涙が光っていた。

せめて、夫の願いを叶えようとマドカも異空間へ向かう。
――だが、その体はカナメの目の前で消え去った。
雲が風で掻き消されるかのように、何の予兆もなく、突然に……。

「ーーーーーっ！！！！」

カナメの声にならない叫びが谺する。
誰かが唱えた致死節がマドカを消滅させてしまったのだ。

「…自分達で自分達の首を絞めているのにも気付かぬか。――人間とは、浅はかだな。では、メフィスト、後は頼んだぞ？」

「ええ」

「我が名はセト。神と崇められ、悪魔へと堕ちた嵐を起こす者…」

セトは大きく両手を広げ、親類一同を風で舞い上がらせる。
風などと生易しいものではない。

もはや、暴風―――嵐と言ってもいいくらいである。
そんなモノに舞い上げられたたかが人間が無事な訳がない。
揉みくちゃにされた人間達を引き連れて、セトはゆっくり異空間へと移動していった。

そこに残るのは、メフィスト＝フェレスと正十字騎士團の姿と、嵐という暴風に荒らされた建築物だった物の成れの果て。
先程まで、そこに八候王（バール）の一人である嵐の王がいたとは思えない程の静けさに、騎士團は冷や汗が止まらなかった。

「皆さんご苦労様でした。『悪魔3体の排除』完了です☆解散してください」

「は、はい…。各自解散！フェレス卿はいかがされますか？」

「私はまだ用があります。しばらくは、この敷地内に入らないようにしてください。
命の保証はしませんよ？」

「はっ！」

騎士團の人間はいなくなり、日も堕ちて尚、メフィストの姿はまだ

そこにあった。
あの子達の帰りを待っているのだ。
異空間に消えた、将来有望なあの子達を…。

あの子達は、ちゃんと戻って来た。
ただ、カナメの記憶には残ってはいなかった。

それから１０年。
何も思い出せないまま、カナメはメフィストの元に訪れた。
祓魔師になるために…。

.

林間合宿［その1］

「おーい！五十嵐ぃー！」

聞き慣れた声に耳を傾け、呼ばれていると気付いた。
振り返れば、正十字学園の制服に身を包み、刀を持った生徒が大きく腕を振って何度もカナメを呼んでいた。

「奥村くん！終業式、終わった？」

「ああ。ようやく夏休みだな！」

正十字学園正門前。
一学期が終り、長い休みを利用して帰省する生徒が次々と通り過ぎて行った。

祓魔塾の塾生には縁のない話だが…。

祓魔師になるには、実践を積む事が必要になる。
学生にはそれが難しく、時間も少なくなりがちになってしまうため、夏休みを利用して候補生としての任務と祓魔師になるための知識を付けていくことになっている。

今日は、その初日。
終業式終了後、集合するようにと言われている。
燐が大きな欠伸をしていると、後ろから声をかけられた。

「奥村くん！五十嵐さん！」

「小猫丸！」
「三浦くん」

「塾やなく高等部(こっち)で会うの初めてやねー」

いつもの柔らかい物腰で、ニコニコしながら話し掛けてくる。
燐や三浦達は学生である。
もちろん、高校生として学園に通っている。
だが、塾以外で会う事は少ない。
カナメは最初から学園には通っていないため、学園内で会った事は一度もなかった。
三浦の後ろには、勝呂と志摩もいた。
勝呂が急かすように“正十字中腹駅”への集合がかけられていると言い出す。
三浦は『一緒に行こ』と、燐とカナメを誘った。

断る理由はなく、燐もカナメも頷いて返事を返した。

「奥村先生からの召集ってことは、何らかの訓練とかかな…？」

「せやろな」

「雪男は“林間合宿”って言ってたけどな」

「今回は理事長がらみじゃなきゃいいんだけどね…」

前回の合宿での記憶が頭を過ぎる。

『あんな怖い思いは、もう体験したくない』と、全員が口を揃えた。

談笑も交えながらしばらく歩くと、人通りの多い場所に辿り着いた。

既に、雪男と霧隠の姿があり、二人の間に“正十字中腹駅”と書かれた看板が立っている。

そして、2人の足元には人数分の大きな荷物が積まれていた。

しばらくすると、遅れて杜山が駆け足で現れた。

それを見て、全員揃ったのを認識した雪男がにっこりと微笑みかけた。

「皆さん、今日から楽しい夏休みですね！

――ですが、候補生の皆さんはこれから“林間合宿”と称し…“学

園森林区域”にて、３日間実戦訓練を行います」

顔はにっこりのまま、声は厳しいものに変わっていく。

「引率は僕、奥村と霧隠先生が担当します。
夏休み前半は主に塾や合宿を強化し、本格的に実戦任務に参加できるかどうか細かく皆さんをテストしていきます。
この林間合宿もテストを兼ねていますので、気を引き締めていきましょう」

皆が気合いよく返事をする。
それぞれ渡された荷物を持って、路線電車に乗り込み最下部に向かって発進した。

「…っち」

電車に揺られながら、霧隠は携帯型のゲーム機に集中していた。

「へー…。先生はやっぱり太刀なんですねー」

隣に座っていたカナメは、画面を覗き込んで呟いた。
霧隠は少し驚いた様子で声を漏らす。

「お前もやるの？」

「暇潰しに少し。ボク、学園に通ってないので」

「あー…、そうだったな」

「あ、今の避けれますよ。ガードより転がった方が確率高いです」

「まじで！？」

霧隠は更に集中して取り組む。
あまりに集中し過ぎて、声をかけても返答はなかった。

やがて、電車は目的地に着いて停車した。
各自荷物を持ち歩き出す。

――正十字学園最下部“学園森林区域”――
“森林区域”なだけに、蝉や蚊が多い。
そして、暑い。

それは皆も感じていたようだった。
勝呂がぼやくと、皆も疲れ気味にそれぞれぼやいた。

「先生、荷物持ちますよ。ゲームしにくいでしょう？」

「おー、頼む」

「五十嵐さん、霧隠先生を甘やかさないで下さい」

カナメと燐は特に疲れを感じていなかった。
悪魔（混血）であるからか、体力は人並み以上であるらしかった。

「何でアイツら、あないに元気なんや」

「何気に奥村くん達て、体力宇宙ですよね」

後ろの方で勝呂と志摩が呟いていた。

「さて、ここでテントを張ります。
この森は日中は穏やかですが、日が落ちると下級悪魔の巣窟と化す

ので、日暮までに拠点を築きます」

拓けた場所に辿り着くと同時に雪男が言う。
蝉の声が多くなり、一段と大きく聞こえる中で男性陣と女性陣に分かれて拠点の準備に取り掛かる。

「おーい。五十嵐ぃ、こっち手伝ってくれ～」

「はーい……って、ゲームですか…」

「おう！」

「しょうがないなぁ…」

テントを張る周りに、巨大な魔法円を描く作業は杜山と神木の２人に任せて、霧隠とカナメは別々に行動していた。
カナメが作業をしている間、何度も『手伝い』という形で霧隠の遊びに付き合わされてしまい、２人に任せるしかなかったのだ。

「うおーい。五十嵐ぃ…」

「待ってて下さい。

今、夕食の準備してるんですから！」

「い～が～ら～し～ぃ～」

「夕食の後にして下さい」

ジャガ芋の皮を剥く隣で、霧隠が我が儘を連発する。
しまいには、包丁を使っている隣で暴れ出す。
魔法円の時と同じように、今回も杜山と神木に任せたいトコロなのだが、残念な事に2人とも料理が得意だとはお世話にも言えない腕前だった。

「おい…俺が変わるよ」

「奥村くん！？」

ジャガ芋の皮と一緒に自分の指まで剥かないように、揺れる体で耐えながら格闘していると、見兼ねてか燐が声をかける。

料理の腕は、カナメも含む3人よりも遥かに上だった。
女性陣は『おー』と感心の声をあげ、男性陣は若干不安そうな声をあげていた。

「五十嵐っ♪五十嵐ぃ♪」

手が空いたと気付いた途端、霧隠はゲーム機片手に飛び付いてくる。

「はいはい。……心配しなくても、理事長と組んだりしてないですよ？」

「その保証は？」

「ないですね。残念ですけど…」

密着してるからこそ成り立つ小声の会話は、当然の事ながら誰にも気付かれていないようだった。

「おーい、メシできたぞー！」

ジャレているように見えたのか、燐は呆れた様子で声を張り上げた。

出来上がった夕食は、カレーとサラダだった。

カレーは燐が作り、サラダは杜山と神木が作った物だ。

カナメはカレーだけ除けて、ご飯とサラダだけを平らげた。

せっかく作ってくれた燐には悪いが、カナメは辛い物が嫌いだ。

ワサビ、カラシ、スパイス系統は全て喉を通さない。
むろん、カレーも然別。

「御馳走様でした」

カレーのルーだけ残して、両手を合わせて頭を下げる。
残ったルーは杜山の皿にこっそり移して、後片付けを始めた。

「カナメぇ、飲み物何いるー？」

「ボク、ミネラルウォーターでいいよ」

「そない言わんと、ジュースもあるで」

片付けも一段落して、クーラーボックスに群がる男子達に招かれる。
男子達の輪に混ざり、一緒に飲み物を選ぶ。

「……」

「どないした？」

急に黙ってしまうカナメに勝呂がすかさず声をかける。

「……ボク、こんな風に他人(ひと)と話したり、笑い合ったりするの初めてだから…」

「そうか…」

「いいね…他人(ひと)と話すのって。こんなに嬉しいなんて初めて知った」

ニッコリと微笑む。
それは、今まで見せた事のない満面の笑顔。

「カワイイ……」

志摩の口から思わず零れ落ちる。
他の男子達も、小刻みに首を振って賛同していた。

「では、食事も済んだところで今回の訓練内容を説明します」

「つまり肝試し、肝試し～♪」

『マジか…？』と、心の声が聞こえそうな表情を浮かべる。
キレはしなかったが、物静かに注意した。

注意された霧隠は、缶ビール片手に上機嫌な様子だ。
勤務中に飲酒する教師が、実際に存在する事を初めて知ったカナメは、少しハラハラした様子で見つめる。

「つかその女、１８歳や言うてなかったか！？未成年やろ！！」

確かに、霧隠は自己紹介の時に『１８歳だ』と語っていた。
それに雪男が首を傾げる。

「何をバカな事を。この人は今年で、にじゅうろ…」

全てを言い終わる前に、空になった缶ビールが直撃する。
むろん、霧隠が投げ付けたからである。

『手が滑った』と言ったが、絶対にわざとだ。

「おい……仕事をしろよ…！！」

「「「……」」」

明らかに怒りの形相を浮かべる雪男を、複数の生徒達が無言で呆気に取られていた。

その視線に気付き、雪男はすぐに我を取り戻す。

霧隠は、そんな様子の雪男を楽しんでいるようだった。

雪男は咳ばらいし、訓練内容の説明に入った。

「…これから皆さんには、この拠点から四方散り散りに出発してもらい、この森の何処かにある、提灯に火を点けて戻ってきてもらいます」

それをクリアした人全員に実戦任務の参加資格を与える。――期間は3日間。

ただし、それだけではない。

「提灯は3つしかありません。置かれている場所は拠点の中心から半径５００m先の何処か、とだけ教えておきます。

…つまり、実戦任務の参加資格は“３枠”しかないという事になり

ます」

“３つ”と“３枠”。
その言葉に、眉間にシワを寄せる。
質問しようと神木が声を上げるも、雪男は次の説明に入っていた。

その説明に沿い、ショルダーバックの中身を確認する。
３日間分の水と食糧、寝袋、タオル、ティッシュペーパー等の生活用品。
更には、コンパス、夜間移動用のハンドライト、魔除けの花火、マッチが１本。

たかが提灯を取りに行くだけなのに、３日も費やす必要があるのだろうか？
カナメは１人で首を傾げていた。

「昼間にも言いましたが、この森は夜間（いま）、下級悪魔の巣になっている。
今の皆さんの実力だと、ギリギリ切り抜けられるかどうかといったところでしょう。
危ないと感じたら、この魔除けの花火を即使ってください。２分以内には、僕か霧隠先生が回収に行きます」

「マッチが１本だけというのは…」

すかさず、三輪が疑問を投げ掛ける。

「――つまり、花火に使えば提灯に火を点けられません。『使う時は、よく考えて使いましょう』」

雪男は、失格（リタイア）の条件の説明をする。

失格条件1。
拠点近くまで来てから点けた場合。

失格条件2。
途中で消えてしまった場合。

失格条件3。
花火を使ったギブアップ。

「各自が、自分の能力を最大限に使う事を考えるのが、クリアへの1番の近道です！さて、皆さん、準備しましょう」

途中休憩

どもども。
皆様お久しぶりでございます。邪餽で～す☆

ページを開いて「あれっ！？」と思われた方もいらっしゃるかと存じ上げます。
「続きじゃねーのかよ！」と思われた方は、遠慮なく次話へ飛んでください。

なにもこんな所で休憩しなくても……と思うのですが、ペース配分が苦手でして…てか、最初の投稿ペースが速過ぎました。

反省しております。

今回、皆様にお伝えしたい事がありまして。
感想(エサ)をください。
…というのではなく、五十嵐　要についての質問コーナーを設けたいのです。

はい。ただのサボりの口実です。…それが何か？

書くのは好きなのですが、自分の頭の中の世界を書いているだけなため、皆様に伝えきれてない部分があると思うのです。

他のキャラは、だいたい原作と変わらないので五十嵐　要への質問を募集します。

期間は、本日１２月２６日から約１ヶ月。
次回の休憩の時に、まとめて発表したいと思います。

場合によっては発表出来ないかもしれませんが、その際はまた次回に回しますので、なんでも質問してきてください。

ご協力の程をよろしくお願いします。

林間合宿［その2］

「“我が心に炎を燈せ”」

既にスタートの合図は出されており、カナメを除く候補生達は森の中へ駆け出して行っていた。

「憑依、青鷺（ごいさぎ）」

青白い炎と共に現れた鳥は、甲高い声を上げてカナメに取り込まれる。

暗闇に照らされる青白い光は、一見するとライトの光にも見えた。

「たぶん、奥村くんの事だから…すぐ『炎』を使うでしょう？ボクが目くらましになるといいんだけど…」

じゃあ行ってきます、と手を振って歩いて行く。

不意に、森に入る1歩手前で足をとめた。

目の前に、自分以外の青い光が見えたからである。

「……」

「…ぷっくっくっく」

訓練を開始してから、まだ１０分も経っていないというのに、早速炎を使ったらしい…。
あまりの早さに、カナメも呆れて言葉を失う。

「…誰にも見つかっていませんよーに…！！」

心の声を言葉にしながら、ようやく足を踏み出す。
駆け足で向かうと、燐の側には、額から血を流した杜山と険しい表情の勝呂がいた。

「ゴメン、そっちにボクの使い魔の火が行っちゃったけど、怪我とかしてない？」

「な…な～んだ…！お、お前のだったのか…びっくりしたじゃねーか！！」

咄嗟の嘘に燐が乗っかる。
勝呂の姿が見えたがための嘘だったが、特に気にしていないようで、携帯に送られてきたメールを確認していた。

送り主は三輪。
内容は、この訓練が1人ではクリアできない、と知らせるものだった。

「伏せろ！」

燐に腕を引かれ、地面に倒れ込む。
木刀を構え茂みの奥からの攻撃を防ぐと、勝呂がすぐそいつの体を押さえ込んだ。

「志摩っ！」

「ぶぉん…っ！？」

ライトをくわえたまま声を出したがために、はっきりと『坊』と言えなかったようだ。
志摩は、辺りをキョロキョロと見渡し首を傾げている。

「光消せ！蛾はライトに集まってきとるんや！」

「…あれ？皆こんな所で何してはるの？」

「お前こそどうしたん！」

まだ戸惑っているらしく、会話が上手く噛み合わないが、もう一度勝呂が促すと顔を真っ青にした。

「大量の蛾に包まれてからの記憶が……き、記憶喪失や」

「そうか…お前、虫嫌いやったな」

現在、２０：４０。

カナメから発せられる青白い光と、勝呂が開いた携帯の明かりが５人を照らす。

カナメの青鷺の炎を嫌うらしく、蛾の大群が集まってくる事はなかった。

暗い森の中を進むのに役立つ炎になっていた。

三輪からのメールには、ある位置までの道案内が書かれており、とりあえず、皆でそこを目指す事になった。

「お前のそれ、いいなぁ」

燐が青白い炎を眺めながら呟いた。

明かりを点しながら虫除けにもなると分かってから、燐や志摩は興

味津々に眺めている。

「それ、どないな仕組みになってんのん？」

「仕組みって…。ただの効果だよ。ゲームとかでよくある、アイテムのオプションみたいなやつ」

「あー…なるほど」

まさか『憑依してます』とは言える訳もなく、できるだけ違和感が無いような理由を作る。
カナメはひそかに、この場に神木がいなくてよかった、と思っていた。

「坊？」

茂みの奥から声がする。
ガサガサと音をさせながら奥へ進むと、三輪がリアカーの前で待っていた。
思っていたより大人数だった事に驚いていたようだったが、すぐ嬉しそうな笑みを見せた。

「はぁ？何やあれ！」

提灯を見つけたのか、志摩は驚きの声を上げた。
その声を聞き、勝呂とカナメもそちらへ視線を移す。

「ははは…」

「こら、1人じゃ運ばれへんわ」

少し見上げた先に、巨大な石燈籠があった。
すぐに、想像していた小さな提灯は消え失せる。
燐が叫んでいたが、妥当なリアクションだと誰も咎めたりしなかった。

この石燈籠の正体は“化燈籠(ペグランタン)”という悪魔で、その名の通り燈籠に憑依する悪魔の事である。
夜間、人が火を灯すのを待ち構え…火が灯ると動き出し、生き物を喰って燃料にする。
女性が特に大好物。
燃料が尽きるか、朝になると動かなくなるのが特徴である。

三輪は、これを見つけて自分達がルールの解釈を間違っていたのではないかと思ったらしい。
勝呂もそれに便乗する。

「あれぇ、坊。『この任務、助け合いはナシや』言わはってたのに

ィ」

「じっ、実戦の参加資格“３枠”て言葉に惑わされたんや！」

そう。
確かに雪男は“３枠”とは言っていたが“３人”とは言っていなかった。
カナメも気にはしていたが、協力戦の事までは考えつかなかったと呟いた。

「…とにかく！協力戦、俺は大好きやから願ったりや！カナメ、神木の携帯のアドレス知っとるか？」

「ゴメン…知らない。志摩くんは、何度も神木さんにアドレス聞いてたよね？」

「俺は、何度も聞いて何度も断られてます」

「あー…やっぱり」

「カナメちゃん、ひどい」

涙目で訴える志摩に、冷ややかな視線を送る。
カナメは、そのやり取りが少し面白くなって、志摩の失敗談を話したり、志摩の反応を見て不適に嘲笑ってみせた。
そろそろ、志摩に精神的ダメージが貯まってきたところで、三輪が遠慮がちに声を上げる。

「とりあえず、この6人で運ぶフォーメーションを考えました」

そう言って、三輪の指示に従って各配置に移動する。
まず、化燈籠をリアカーに乗せ、火を点けた時に動き出さないように封印する。
封印には化燈籠が封じられていた台座の四角にある札を使い、化燈籠に直接張り付けて経を唱え続ける。
担当は勝呂。

化燈籠は火が点いた状態でないといけないため、燃料(エサ)が必要となる。
燃料には蛾を使い、細めに補給を行う。
担当は杜山。

火を点けると明るくなり、蛾が群がるためガードが必要となる。
担当は三輪と志摩。

6人の中で、馬力がある人がリアカーを引く。
担当は燐とカナメ。

というフォーメーションが出来上がった。

「用意はいいか五十嵐！」

「いいよ！せーのっ！！」

「「うおぉぁああ…！」」

少し狭いが、２人並んでリアカーを引く。
化燈籠を積み、更には杜山も乗っているため、燐とカナメでもすんなりと引いて歩く事は出来なかった。
ゆっくりとだが、リアカーはゴロゴロ、ガラガラと進んだ。

「いや、ホントすごいわ。奥村くんもカナメちゃんもどこの星の人なんやろ…」

「ただ、まだ油断ならない難所が待ってるんですけど……」

「難所？」

三輪は頬に冷や汗を浮かべ、物静かな言葉を使う。
嫌いな虫に囲まれた志摩が不安げに聞き返した。

「はい…。しばらく歩きますけど、たぶん…足止めをくらうんやないかと…」

三輪の言葉に、それぞれ悪い予想を頭に浮かべる。
まさか、その予想を上回る結果が待っている事も知らずに、６人は化燈籠を乗せたリアカーを引いて行くのであった。

林間合宿［その3］（前書き）

後書きに発表があります。最後まで拝読していただけると有り難いです。

林間合宿［その3］

リアカーを引いて数時間…。
前も後ろも闇に包まれ、ゆっくり進んでいた車輪がピタリと止まる。

「橋…？」

「うおっ！吊橋……！？」

6人は、三輪が言っていた“難所”に辿り着く。
目の前には吊橋。だが、ほとんど崩れ落ちており、人が行き来できるのか分からない状態。
橋の下は川ではなかった。

志摩が叫び声を上げる。
川だと思っていたモノの正体を教えてくれる叫びだった。

「下下下。ぎょ～さんおる…っ！！」

彼がこの世で最も嫌いであろう“それ”が、橋を渡らねばならない距離を埋め尽くしていたのである。

「…どうする？青鷺（ごいさぎ）で焼き殺そうか？」

「でも、そんな事したら橋も燃えちゃうよ？」

「んー…面倒臭いなぁ…」

青鷺の炎で焼き殺せば、動かなくなった残骸を踏み荒らして進む事は可能になる。
橋が燃えてしまっても渡る手段はあるのだが、困った事に、橋には多くの種子字の札が貼られており、何かが封じられているようだった。

そんな橋を燃やせば、札は燃え尽き、封印も解けてしまい、その封印されていたもので被害を受ける可能性が生まれてしまうのである。

「も…ももも、もうダメや。フフフ…失禁したろか」

顔面蒼白で後退りながら、女子2人を前にして弱音を吐く。
燐は『失禁すりゃいいじゃん』的な事を平気で言うが、三輪が丁寧な口調で止めさせた。

「志摩くん。ちょっと、それ貸して」

「ちょっ…！なにを……ぎゃあああぃ！！」

カナメは志摩からキリクを奪うと、虫が溜まりうごめく中に突っ込んだ。
志摩の叫びを完全スルーしながら、ゴツッ、ゴツッ、と何度も上下させる。

キリクを引き抜き、それが足首辺りまでの浅さであると気付いた。

「以外と浅いなぁ。ん？」

歩いて渡れる。
しかし、リアカーを引くのは難しい…。
カナメが頭を捻り、唸っていると誰かが肩を叩いた。

振り返ると、スケッチブックとマーカーペンを持ち、経を唱えながら筆談を持ち掛ける勝呂がいた。

『化燈籠（ペグランタン）に渡らせる』と書かれた文字に1番早く反応したのは三輪だった。
よく分からない4人は、疑問符を浮かべながら頭を傾げる。

『図解する』。
経を唱え続けながら、筆談までこなす器用さに驚きつつ、三輪は文字通りに図解されたものを丁寧に説明し始めた。

「まず、僕と奥村くんが向こう側へ渡り…あ、奥村くんはその時リアカーを運んでください。
そして五十嵐さんが、杜山さんを連れて渡ります。
坊は経を止め、札を剥がして化燈籠の封印を解きます。封印を解かれた化燈籠は、五十嵐さんと杜山さんに向かって来るはずやから…
僕が札を貼り付け、経を唱えて動きを止めます」

勝呂の図解を元に、三輪が丁寧に説明する。
絵の上手さと、分かりやすい説明のおかげで疑問符が解消される。

「「「おぉーーー…」」」

「え!?ちょっと待って!俺は?俺はどないするんですか?!」

「置いてく?」

「五十嵐…そりゃねェだろ。…ほら、泣いてんじゃねーか」

「しょうがないなー…」

カナメは面倒臭そうに頭を掻きながら、適当に志摩に謝った。
三輪や勝呂にも散々言われて、涙はすぐには止まなかったが…。

結局、三輪と共に橋を渡って向こう側へ移り、続いて燐がリアカーを持って渡って行った。

「…じゃあ、しっかり捕まっててね。火傷はしないから、心配しないで」

「う、うん…」

杜山は、青鷺の炎を警戒しているらしく、カナメが差し出した手を取るのにしばらく時間がかかった。

「高いからね、目はつぶった方がいいと思うよ」

「大丈夫…」

「…いーち、にーの、さーんっ！」

青鷺の能力を背中に集中させ、青白い炎の翼を創り出すと、地面を思い切り蹴り、ジャンプする勢いを利用して空へ飛び出した。
カナメと杜山は、互いの両腕を掴み合った姿で浮遊する。

「準備出来たよー」

「こっちも準備ＯＫです」

カナメと三輪が、勝呂へと伝える。
次の瞬間、化燈籠が解き放たれた。

人の声でも、獣の声でもない低い叫びを上げながら、まるで生き物のように４つの足を器用に動かしながらカナメ達に向かって来る。

「意外と速っ！！」

化燈籠の女好きの賜物なのか、虫達の群れの中を進んで来るとは思えないほどのスピードだった。
カナメは、周りの草木を燃やさないようにリアカーを通り過ぎる。
つられてリアカーに向かう化燈籠を待っていたのは、封印の札を持ち、構えた三輪だった。

「カーン！
稽首正無動尊秘密駝羅尼経！」

封印札を貼られ、動けなくなった所をさらに経を唱えられてただの燈籠に戻る。

「稽首正無動摩訶努玉…」

三輪は経を唱え続け、勝呂がこちらに辿り着くのを待った。
カナメ達も体勢を立て直し、リアカーの場所へ戻る。

「上手くいったな！これで一安心…」

ブチッ

「……ブチッ？」

燐も、皆も、その音のした方に視線を向ける。
勝呂を迎えるために左手を伸ばし、右手には木刀を持っていたのだが、その近辺にあった縄を切断した音だったようだ。

つまり、封印を解いてしまったという事……。

「れっ？」

自分がやってしまった事に気付く間もなく、虫達の中に隠れていた巨大な蛾が、触手を伸ばし、燐を捉えた。
耳を塞ぎたくなるような嫌な鳴き声を掻き消すように、燐の悲鳴が

轟いた。
手足をバタバタと動かしてみるも成果はみられず…。
「大丈夫だ！倒してすぐ追い付くから、皆は先に行け！！」
燐は、そう促す。
不用意だったにしろ、自ら封印を解いた責任もあり、何より、皆の前で炎を出す訳にもいかなかったからである。
「お前は……また、それか…！」
勝呂が睨み付けながら呟く。
以前、強化合宿の際にも、燐は体を張って身代わりを買って出た。
間違えれば死んでしまうかもしれない相手に、無謀とも言える発言。
しかも、実行してしまう。
もし、あれが試験ではなく、本当の実戦だったら…。
思いを馳せる勝呂に対し、燐は苦笑し、一言だけ謝った。
「阿呆が！助けるに決まっとるやろ！！」
怒鳴り声にも近いそれは、燐を黙らせた。

「志摩！キリク貸せ！！」

燐がいつも応えを待たないように、勝呂もまた、応えを待たずに行動する。
逃げる準備をするように告げ、封印札をキリクで刺し、巨大な蛾に突き立てる。

「ノウマクサンマンダ、バサラダニカン！」

素早く印を結び、攻撃を仕掛ける。
キリクに雷が堕ちる。キリクが避雷針の役割を果たし、確実に蛾に直撃した。

悲鳴が鳴り響き、燐は投げ落とされる形で解放された。

「早よ来い！
俺にはこれが限界や！！」

「え？倒してねーの？」

あの程度で倒せるようなら、この訓練は必要ないだろう。
ただの足止めに過ぎない。

「奥村くん！勝呂くん！」

カナメが急かす。
燐も勝呂も、急いでリアカーを引く準備をする。

「逃げろォーーー！！！」

勝呂の合図と共に、燐とカナメは走り出す。
必死だったせいか、今までにないスピードで森を駆け抜けて行った。

空が少し明るくなる。
目覚めた小鳥が、ピチチ、と鳴いた。

巨大な蛾が後を追って来ない事に気付き、ゆっくりと進んでいた6人は、ようやくスタート地点に戻る事ができた。
霧隠の歓迎の声と、既に到着していた宝と神木が出迎える。

「ご苦労様、青鷺」

ポツリと呟き、憑依を解く。まるで、ロウソクの灯が消されたかのように、薄らと煙を上げて青鷺は役目を終え消える。

「ひゅーーーーーー……」

一息入れようとしていた全員に、聞き慣れない声に気を取られた。

『シュタッ』と、わざとらしく舞い降りたその人物は、鎖に繋いだベヒモスを解き放った。

そいつがアマイモンであると気付いたのは、カナメと燐と霧隠の３人だけであった。

林間合宿［その3］（後書き）

どうやら、ウチの五十嵐　要が『不純と神』様の作中に出演させてもらえるそうです。

やー…

嬉しい限りですなー。

詳しくは、作品『転生者の祓魔師』をご覧ください。

林間合宿［その４］

数時間前…。

地上の誰からも見られていない所で、２人の悪魔と１匹のベヒモスが息を潜めていた。
霧隠は気付いていたようだが、２人の悪魔の片割れはそれが気に入らないようだった。

「アマイモン。この森の主に、挨拶は済ませたか」

白とピンクの紳士が、ベヒモスを連れた片割れに尋ねる。
アマイモンと呼ばれた片割れは、無表情で簡潔に答えた。

「ハイ。同胞を殺されてるので協力的です」

「今回は、私も観覧させてもらおう」

紳士……基、メフィストは真面目な口調で宣言した。
以前、アマイモンには正十字学園町の一角を『破壊』という被害を受けた事があったからである。

悪魔だが、正十字学園の理事長という責任者の立場に席を置いてい

るメフィストにとって、アマイモンの行き過ぎた行動は頭痛と溜息の要因となっていた。
だが、そもそもアマイモンを呼び出し、奥村　燐の力を見たくないか？引き出してみたくないか？と持ち掛けたのもメフィスト自身だった。

「…しかし、降魔剣（クリカラ）はあの女が隠してしまっているし」

アマイモンは、ただ、率直に奥村　燐の真の力が知りたいだけなのだ。

「どうやって、奥村　燐をキレさせようかな。カナメも本気で闘ってくれないかな。どちらにしろ…あの女…邪魔だな……」

やる気を見せる弟（アマイモン）に、メフィストは再度忠告する。

「今回は私の言う通りに動けよ。地震は起こすな。学園を壊すな。誰も殺すな」

アマイモンからの返事はない。自分の思考に耽って、その耳に届く言葉は存在していなかった。

「帰って来たようだな。……いいか、アマイモン。奥村　燐や五十嵐　要の力を引き出すのは構わんが、やり過ぎるなよ」

「ハイ。兄上」

アマイモンはピョーンと飛び跳ね、自分に注意を引き付けるために、わざわざ『ひゅー』と声を出しながら落下して行った。

そして、時は戻る。

『シュタッ』と声を出して舞い降り、ベヒモスの鎖を解き放つ。

「ゴー。ベヒモス！」

勢いよく飛び出したベヒモスは、霧隠の剣技によって簡単に吹き飛ばされた。
アマイモンもまた、霧隠によって発動された“絶対牆壁”に弾き出され、何１０ｍも吹き飛んだ。

「魔法円を描いた時に、中にいた者は守られ…それ以外を一切弾く“絶対牆壁”だ。まあ、しばらくは安全だろ」

額の汗を拭いながら霧隠が言った。
一瞬にして、塾生達に不安が過ぎる。

「これも訓練なんですか？いくらなんでも、ハード過ぎじゃ…」

「そんな事より、さっきのは何なんですか！？」

霧隠は髪を纏め、“ＣＣＣ”と記されたポリタンクを取り出した。

「訓練は終了だ。今からアマイモンの襲撃に備える。
ＣＣＣ（トリプルシー）濃度の聖水で重防御するから、皆こっちに集まれ」

凛とした声で集合を掛ける。すぐに、神木からアマイモンと言われた者の正体を問い掛けられる。

「アマイモンって、八候王（バール）の“地の王”ですか」

かなり不安そうに尋ねた彼女に返されたのは、『そうだよ』の一言

だけだった。

「だから防御するってんだろう。ホラ並べ！」

次々に聖水を頭から掛けていく。もちろん、燐とカナメは省かれた。
霧隠が守護の呪文を唱え、宙で十字を切る。

「よし。まあこれでいざ何かあっても、体が乾ききるまでダメージを軽減するだろ」

吹っ飛ばされたアマイモンは、木々の上で時が来るのを待ち構えていた。
正直、霧隠を殺したい。
しかし、メフィストに止められているため、仕方なく我慢しているところだ。

「まだかな。奥村　燐とも、カナメとも、早く闘いたいんだけどな…」

今回の目的は、燐とカナメの力を引き出す事。
本来なら、周りの人間どもなど気にせず邪魔なら殺すのだが、禁じられてはそれもできない。

悪魔と違って人間は脆い。
だから、手加減が必要なのだが……それも難しい。
額にデコピン程度でも、頭蓋骨陥没。軽く蹴りを入れただけでも、ヒビ、骨折は当たり前。
再起不能になるような怪我もダメ、と言われるとやる気が削がれるのだ。

「……おや？」

アマイモンが集中する。
その先には、自ら絶対牆壁から出ようとする人間の姿が見えた。

「も、杜山さん！？」

「おいおいおいおい！！」

『絶対出るな』と言われて数分もしない内に、牆壁から出て行く者が現れた。
血の気の多い、燐や勝呂ではない。
信じがたい事に、杜山　しえみ…だった。

霧隠が停止するように命令するが、まるで耳に入っていない様子で、足が止まったのは、絶対牆壁から完全に出てしまってからだった。

「あれは……寄生虫！？」

霧隠の独り言に促され、杜山のうなじをよく見ると、皮膚の下でウネウネと動く蚯蚓腫れ（ミミズ）のような物がある。
それは、先程まで嫌と言うほど見ていた虫によく似ていた。

「周りが同じ臭いだらけで気付かなかった……くそっ、いつの間に？！」

絶対牆壁の外に出た杜山に気付いたのか、先程飛ばされたはずのアマイモンが平然と姿を現した。
かなり高い所から飛び降りたであろうに、着地は怖いくらいに静かだった。

「その娘に何をした！？」

「ん？虫豸（チューチ）の雌蛾に卵を生み付けてもらいました。
孵化から神経に寄生するまで随分時間がかかりましたが、これで晴れて、この女はボクの言いなりだ」

アマイモンは杜山を寄り添わせた。杜山が抵抗する事はない…いや、できない。
寄生された体に自由はなく、操り人形と変わりない。
杜山は、アマイモンに促されるがまま、彼の腕に座り、しがみ付く。
アマイモンは杜山を抱えたまま、そうとは感じさせないくらい飛び跳ねて行ってしまった。

「ま……待てこのトンガリ！！」

「コラ！！お前が待て！」

「杜山さんを返せ！」

「うぉい！お前も待て！」

燐とカナメは、アマイモンを追いかける。
霧隠の制止の声など耳には入らない。
待ち伏せていたベヒモスが行く手を阻むが、怯んだ燐を追い越して、
カナメのキックがクリーンヒットした。

「邪魔だあぁぁっ！！」

勢いよく蹴り飛ばす。
だが、相手も悪魔。
サッカーボールのようにはいかず、自分の意思を持って、襲い掛かって来る。

「先に行って！ボクも後から向かうから！！」

「お、おう！！！」

駆け出す燐を見送り、目の前のベヒモスを睨み付け、懐に忍ばせて

いた召喚用の札を取り出した。

「“稲荷の神々に崇められし尊きモノに畏み申す。我、風の者。汝の炎の糧にならん”！九尾・炎孤！！」

「九尾ィ！？」

「炎孤、そいつ食べていいよ。人間は殺しちゃダメだからね」

『承知』

「コラ、五十嵐っ！待たんかぁ！！」

「すみません！待てません！！」

九尾は勝手に攻撃し始め、カナメは燐の後を追いかけて走り出した。
霧隠が注意しても、返事は拒否。
そして、カナメは目の前から消え去っていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1138x/

青の祓魔師～紫眼が見つめるモノ～

2012年1月13日00時49分発行